

戀に肩をたたかれた。

tomogon

■01

その時期、私はとても苦しい戀をしていた。

後から振り返れば、それはとても・・・幼くて拙く戀と呼べるものではなかったのかもしれない。でも「恋」ではなく「戀」だと思っていた。

でも。

今でも・・・その時のことを思い出すと・・・

胸に疼痛が走り、見上げる空の色が少しだけ鮮やかになるような気がする。

気がついたのは、冬期講習の最中のことだった。

予備校の冬期講習というのは開始が早い。

私立学校の冬期休暇に合わせて、講座を開始するからだ。

だから公立高校の生徒は、普段の授業を受けながら冬期講習を受けることになる。

最上級生となれば、もう、この頃にはほとんど授業などないに等しい。

常に10ヶ月ほど先の完了目標を達成している教職員達は、ほくそ笑んでいることだろう。

すべてのカリキュラムを終えるかどうか、というのが彼らの最大重要事項のひとつである。

・・・ここは予備校の教室の一角だった。

予備校と言うと、受験に成功するという目的のために集う同年齢の男子女子がひしめき合う場所だ。

少なくとも彼女はそう定義している。

そして、同じクラスに所属するということは同レベルで同じ志望校を狙っており・・・仲間意識が湧くどころか、周囲は皆、敵手だと言う意識を植え付けられる。

それは彼女の所属の学校も同じであった。

進学校で、進学率は100パーセント。

誰もが必ず、この国か・・・若しくは他の国の要人になるという高い可能性を持った集団を教えるという自負を持った教師達の誇らしげな顔を毎日見ながら、その日一日を過ごしている群の中で生きている。

彩世（さよ）はまだ誰もいない教室に着座すると、木製のベンチの背もたれに鞆を置いた。底に鉾が打ってある丈夫なもので、彼女が3年間使用してきたものだった。

経年によって深い色合いになっており、それがとても誇らしかった。

無理を言って買ってもらった入学祝いだった。

鞆の指定のない自由な校風に感謝したものだった。

彩世はコートを脱ごうとして・・・そこで飾り釦にかけていた手を止めた。

まだ暖房が行き渡っていないので、少し肌寒かったからだ。

ここは自由席なので、狙った場所を確保したければ、早めに教室に入らないといけない。

彼女は最後尾の端に座った。

あと小一時間もすれば、この教室は熱気で暑いくらいになるだろう。

この時期、私学の生徒はすでに休みにはいつているので、彼らは開始ぎりぎりにしかやって来ない。

まだ他の棟でも授業を行っていることも影響していた。

今日も彩世が一番乗りだった。

がらんとした空洞のような箱の中に入ると、どうも気落ちした夏を思い出した。

しかし今は気持ちが軽い。

吐く息が白かった。

だから、コートはまだ着たままにしておく。

手袋だけは脱いでそのまま鞆に放り込んだ。

・・・今冬はよく冷えてしかも雪が多かった。

ここは午前中空き教室になっているが、誰も居なかった。

夏の時期には冷房が寒いくらいで、しかし暑さを逃れるために、自習室として解放されていたときの盛況ぶりをみると、まったく異質な空間に思えてくる。

昨今の経費削減対策とやらで、授業の直前になるまで暖房が入らない。

・・・彼女は鞆の中から教材と筆記用具を取り出した。

辞書は必需品だ。

今は電子辞書の携帯を赦されていたが、模試の時間は持ち込み使用が禁じられていたし、なにより画面で見ると記憶が薄れるのが早い気がする。

それは「探す」という行為がないからだ。

また前後の解釈について読み取ることができない。

必要なものを必要な時に得るといえるのは合理的ではあったが、その分、何かを得られていないような

気がして仕方がない。

辞書は紙表紙がよれて、今にも剥がれそうになっている。

彩世は必要最小限しか持っていない。

文房具も素っ気ないくらいに何も持たない。

同年齢の友人達は皆、きらびやかなものを好んだが、彼女はあまりそういったものに興味がなかった。

「男の子といるみたい」

家族にもそう言われる。

確かに自分でもそう思う。

男女比が異常な値の学校に進学したからだろうか。

それとも・・・彼女はやはり嫺やかさという文字とは縁がない人間なのだろうか。

興味の対象が世間一般的なそれとは違うような気がした。

女の子らしい、と言われるようなものに目が行かない。

幼い時にはだいぶこのことをからかわれた。

そして彼女は良くそのことで泣いたが、からかわれた事が悔しいのではなく、自分が多数に存在しないのだということを知るのは一度で良かったので、何度も繰り返し言われることに辟易していたからだ。いつの間にか泣くこともなくなった。

高校に進学して、それは緩和されたがそれでも敬遠されがちだった。

徒党を組むことを決してしなかったから。

人数が少ないから、同性の同級生達は皆、グループを作って群れたがる。

しかし同じ程度の学力レベルの者たちはそれほど品劣ではなかった。

彩世と距離を置いたが、それでも彼女は普通に過ごすことが出来た。

彼女は、長い黒髪を後ろで束ねる。

受講中には邪魔になるだけの髪を・・・そろそろ切ろうと思った。

冬は寒いから髪を伸ばす、と言った友人に彩世は反論したことがあった。

冬は寒いから髪を切るのだ。渴きが早く手間もかからない。

そう言うと、呆れた顔をして、友人は次に納得したような顔をした。

「彩世は変わってる」

そうだろうか。

合理的思考であれという学校の指針に従っているだけだと思うが。

■02

木製のベンチは冷え切っていて、服の上からでもその冷たさが伝わってくるようだった。

暑くてぼんやりするよりはましなのかもしれないが、それでも室内が快適な温度になるまではまだ少し時間がかかりそうだった。

・・・外から来たので、それでもだいぶあたたかく感じる。

しかしそれは錯覚なのだとすることに気がついていて。まだ手がかじかんでいたから。

これほどの寒さを体験したのは、久方ぶりのことだった。

親の若い頃はこれが普通だということだったが、彩世はその時代を生きているわけではない。

だから、そうなんだ、と適当に受け流すことにしていたが、張り合いのない娘を持ってつまらないと言われた。

それなら、一体、どんな人間だった皆が満足するのだろうか。

迎合するつもりもなかったし同調するつもりもなかった。

そういう生き方しかできなかった。

彼女は周囲を見渡して、人の気配がないことを確認した。

正規の手続きを経て受講しているのに、後ろめたく感じるのは・・・彼女は自由席のこの場所を定席としているからだった。

縄張りのように主張するつもりはない。

けれどもこの席に座りたいために、開始時刻よりずっと前から教室に入り、空調が行き届かない時間をじっと耐えていた。

毎日、座る人間が違っている。

受講生は同じ顔ぶれなのに、彼女が一番後ろの席から眺める背中はいつも様々に違っていた。

これは、決められた配席しか知らない彩世にとってはとても新鮮なことだった。

どこに座っても良い、と言われると人は他者と距離を置こうとするためか、末席や端に座りたがる。同じ講習料金を支払っているのに、一番後ろの、声が聴き取りにくく板書も容易ではない場所に座りたがる者の気持ちが理解できなかった。

しかし、今は、彩世は最後尾の席に座っている。

遮光用にフィルムを貼られた窓硝子は淡く曇っていた。

また外は冷え始めているらしかった。ここだって相当に寒いのに。

春先になれば、この席にも日差しが届いて、午後の授業は睡臥に心地好い魔法の呪文のように聞こえるだろう。

しかし今は窓硝子から漏れる冷気で凍えるほどだった。

・・・あたたかい缶コーヒーを道中買ってくるか、自宅からあたたかい飲み物を持参すれば良かった、と少し後悔する。

予備校内の自販機は一般のものより廉価であったが、それでも紙コップの中の液体が冷えてしまう前

に飲みきってしまう自信がなかった。蓋付きの飲み物で保温性に優れたもの、となるとやはり自分で用意するしかなかった。

塾の講師が、授業中に暑がって腕まくりをしたり、冷たい水を求めたりすることが信じられないくらいに冷え込んでいた。

着脱可能な防寒具でもって調節しなければ、所狭しと不特定多数が集う場所であつというまに体調不良を引き起こしてしまう。

・・・そしてこの授業は、板書ノートでさえ入手したいという希望者が多く、受講も抽選になるという前代未聞の講座だった。

居眠りをする者が居ないという、予備校の冬期講習ではあり得ない授業だった。

しかし、彩世がこれを受講できたのは幸運ではない。

彼女の学校では優先枠があり、信じられない倍率の受講希望者よりずっと低い確率で抽選することができた。

模試もほとんど無料で受けることが出来る。

母集団のレベルを維持するための策であるが、少子化や教育指針の変更に伴う単校あたりの受験率の低下は防ぎきれない。

今はサテライト授業なども充実しているから、この教室に収容できる人数以外にも・・・他の地域で受講している者も居るだろう。

彩世は慣れ親しんだ筆記具を出した。そしてあたりを少しだけ・・・視線を周回させて、様子を窺う。

誰も見ていないことを確認してから、彼女はそっと・・・それを隠すためにわざと不自然に置いた教材と筆記用具を手の平で机の上を右から左に滑らせた。

彼女が座っているのは、正面から右手の最奥の場所だった。

だから。

右側には座席がなく、狭い通路と昔は白かったであろう壁が立ちはだかっているだけだった。

一体、どれだけの者がここに座ったのだろう。

どれだけの者がこの通路を通りながら空席を探したことだろう。

人気のない空間に入る度に、そう思う。

以前はそうは思わなかった。

それなのに・・・今はこの空間がとても狭く感じた。

自分は、これほど狭い空間で何をしているのだろう、と思う。

■03

彩世は溜め息を漏らした。

・・・吐息が白く濁って重力に逆らい、遠逝していく。

・・・人の生命については、文学作品でしか触れたことがないが。

淡い命というものは、こういうものなのかな、と思った。

この間、知人の母が亡くなったという話を聞いた。

しかしどことなく戯曲めいた出来事にしか思えない。

母が、そういう年代になったのね、と寂しそうに呟く様を見て、自分もいつか同じ言葉を口にするようになるのかな、と予感めいたものを感じた。

人の生命についてたったそれだけしか認識できないことも認識していたし、それ以上の物思いをいつか自分が体験するだろうということも覚悟というか予測はできていた・

彩世は机上を眺めた。

・・・また今日も「それ」はあった。

彼女が誰よりもここに早く来る理由がそこにあった。

この席に座らなければ意味がなかった。

それはここにしかなかったから。

一講座分くらいの時間、早くここに来ている。

「それ」に出会うために。

彼女は微笑んだ。

“おはよ”

それはそういう書き出しで始まっていた。

彩世も小さく「おはよ」と声を出す。

自然と、微笑みが浮かんでくる。

鉛筆で書かれていた。

彼女が読み終わった後、消去できるように。

それはその日、彩世が座っている間しか存在しない・・・雪のような儂い存在だった。

誰かが読んでも意味がわからないだろう。

毎日のように続いている、彩世しかわからない暗号のような・・・選び抜かれた言葉だったから。

“おはようございます”でもなく“おはよう”でもなく“おはよ”と書かれていた。

その部分だけが、この人物がとても若い人なのだと彩世に教える。

“おはよ”

彼女は微笑む。

彩世がそれを読む時間は朝ではなく昼下がりの時間であったが。

しかし、その挨拶から始まる言葉の後は、彼女が教科書の世界でしか見たことのないような、流れるような美しい言葉の数々だった。

“おはよ

今朝は寒いですね。

この教室の位置は、お昼を過ぎると西日が入ってくる位置にありますので、あなたの時間にはちょうどよい暖かさになるのでしょうか“

彩世がここにやって来る講義のことを、その人物は「あなたの時間」と言った。

それがどうにも・・・古風であるのに、なぜかとても気に入っていた。

大変に知性のある人物だと思った。

男性か女性かはわからない。

それでもどちらでも良かった。

美しい語彙というものは、性別を選ばないのだと思った。

これほどまでに綺麗な日本語を操る人物が、予備校に通っていることと、ここに座って聴講しているのであれば、彩世ときっとほぼ同じ年齢であることに鑑みると・・・彼らの将来が自分と違うのだということが判る。

殺伐とした空気の中で、この文字はとても・・・彼女を穏やかにさせた。

競争してばかりの世界に生きてきた。どんなに親しくても、試験の時は誰もがライバルだった。

そんな環境にあって、それでも・・・その先があるのだと思った。

つまらない人生だとは思わない。

まだ始まったばかりの路に区切りをつけるつもりもない。

似たような価値観に、似たような将来像。

いずれこの国の中核を構成するような候補生たちと一緒に過ごすことは彩世の意欲を大変に刺激した。

でも、自分が至高の存在であるとは思えない。

だからこそ。ここに来ているのかも知れない。

自分の過ごす校舎に集う者たちだけにしか目を向けることができないという状態が怖かった。自

分は・・・これからどこに行くのだろうか。すでに決めてしまった路の上がいやだと言っているの

はない。けれども、不安定で、そして・・・どこに行けば良いのか誰かに教えて欲しいと思わないのに、誰かにそれを認めて欲しいと思っているのだ。

■04

彩世がその書き込みに気が付いたのは、冬期講習会の翌々日のことだった。

机上に出しておかなければならない受講証の下にそれはあったので、しばらく気が付かなかったのだ。

授業が終わりに近づき、講師が次回の講義内容の説明と予習の範囲を説明し出すと、皆が開いていたテキストや辞書などと一緒に閉じ始めた。

彩世も同じだった。

各回、受講の範囲は予め決められており、人気の講師は毎回その範囲を越えた内容に着手することはない。これは彩世の通う学校でも同じだった。

不思議なもので、最初は予定通り進んでいながらも、定められた範囲が終了しないことを畏れて、その講師も次回の内容にまで及んだ講義をするが見通しが立つと、とたんに、内容の濃い話をしたがる。

それはこの予備校に限った話ではない。

本当に進学を意識する者は、教科によって予備校を変える。

授業の終わりも同じだった。

予習を義務づけることによって、たとえ、その回の内容が終わらなかったとしても模範解答さえ配れば免責されると思っている。

苦い笑いしか浮かばない。

彩世は、受講証を持ち上げて、いつものとおりに紛失防止にパスケースにしまおうとしている時に、受講証の裏面が汚れていることに気が付いた。

天井の照明に反射して、机上の一部が鈍く淡く光っていた。

指先が鉛筆の芯で汚したように灰色の鉛色が付着していた。

彼女は、しばらく鉛筆などを持ったことがないことに、気が付いて、まず指先を見て苦笑した。

小さい時にはそれらを持ち歩くことを常にしなさいと言われていたのに。

それなのに、今は製図用の標準より少し重い筆記用具を持ち歩いている。

柔らかい芯で、筆圧によって太さの変わるそれを、彩世はしばし見つめていた。

・・・綺麗な文字だな。

それが最初の感想だった。人の文字というのは、その時の感情であったり状況であったり、それまでの教育の程度がわかるのだから、文字というものは、配慮して残さなければならない、という話を教師から教えられたことがあった。

それを思い出す。

確かに、美しい文字というものは目につく。

そしてその文字が紡ぎ出す内容について興味を引かれる。

今では、文字を書くというよりタイプする事の方が圧倒的に多い世の中になっていったが、それでも、文字を書く行為というものは、人間が捨てることのできない習性なのかもしれないという説を否定する気になれないほど、その文字は綺麗だった。

そして、次に、彩世はその文字が載っている場所が・・・彩世の座って居る場所に居る者だけしかわからないように書かれていることに気が付いた。

受講カードには顔写真が張っており、ICカードによって受講管理が行われている。だから机に出す必要もなかったのだが、先般、このカードを偽造した者が出たということで、顔写真のプリントされたカードを、受講中は机に出す決め事が浸透されてきたところだった。

正規の申し込み手続きを経ないで、受講する者が後を絶たないという問題から解消されたが、管理されていることについて、あまり良い感情は持てなかった。

ホログラムシールが貼られたカードは特殊仕様であるので、講師や補助をする助手はいちいち名前を確認しない。それを持っていることに意味があるということらしいが、まったく意味があるとは思えなかった。

そこまでして受講したい講座は、常に満席で、そもそも、偽造したカードを持ち歩いていても、配席の段階で判明してしまうことだから。

学びたい者は学ばば良いし、それを放棄することの重大さについて悔やむ者は、その瞬間には悔やまないものだ。

彩世はそう思っていた。

自分も、学校の奨めで指定された予備校で、格安の料金でなければ、わざわざ受講しようとは思わなかっただろう。

しかし、どうしても、この期間に受講したかったのだ。

満員の部屋で、淡々と説明する講師の話をごっそり録音したりすることもしないし、テキストを違法にコピーするつもりもなかった。

普通に受講して、普通に学ばば良いと思う。

だから、その机上の文というには短いものを見かけたとき。

彼女は眼を見開いて、しばしその筆跡に視線を注いでいた。

“おはよ 暖房が行き渡る前にかじかむので このように文字を残しています”

それはそんな書き出しだった。

細かいけれども等間隔で、絶妙の間隔で書かれているので、それが人によって書かれた文字であることに気が付かなかった。

彩世は一瞬、眉を顰めてその文字を主の意図を探ろうとした。手が止まって・・・周囲が帰り支度を

しているというのに、彼女は鞆に入れかけた革巻きのペンケースを取り出した。

長いベンチシートで通路側に彩世は腰掛けているので、奥に座る者が通路に出ることが出来ないため、彩世は慌てて立ち上がった。しかし、視線はそこに注がれていく。

．．．．その言葉が自分に向けられた言葉であったからだ。

■05

“あなたの時間ではもうここは暖まりましたでしょうか。

あなたの書いた「苦しい恋が捨てきれない」という言葉に深い感銘を受けています。

そんな表現すら陳腐になるくらい、深く。

捨てられないからそれを戀と呼ぶのです。

それは、戀ですよ”

繊細な人物だと思った。

これほど難しい異体字を滲ませることなく書く人は、一体どんな人物なのだろうかと思って興味を持った。

それが、はじまりだった。

彩世は「戀」という文字に酷く共感した。

この文字を乱れや躊躇いなく書ける人物を多くは知らない。

彼女はゆっくりと返事を書いた。

そこに書いてある文字を消して、返信を書くことになったことをとても残念に思った。

このままこの文字すら残しておきたいと思う程に、染み入る言葉だった。

目に飛び込んで来る程の美しさを持つのに、それでいてとても読みやすい間隔を持ち合わせている不思議な文字に、彼女は夢中になった。

あなた、と呼ばれることにもくすぐったさを感じた。この机に書き込みをするのは、受講生しか存在しない。その中で、これほど知性に溢れた人物が彩世の言葉に耳を傾けて、書き込みをする事に対して、彼女は昂揚せざるを得なかった。

もちろん、受講内容についておろそかにするつもりはなかった。

でも、着席して真っ先にそれが更新されていることを確認し、休憩時間には再読し、そして次の休憩時にはそれらを抹消しなければならない心残りを堪能しながらも、彼女は次のメッセージを込めて上書きを始める。

“こんにちは”

彼女はいつもそこから始める。

拙い文章しか紡ぐことが出来ないが、それでも相手は彩世のことを“あなた”と言う。

それが嬉しい。

同じように、こんにちは、と囁くことで彼女そのものであることを訴えるような錯覚を味わっているだけなのかもしれない。

けれども。

ひとりの大人として呼ばれるような気がした。

現在数多あるデジタル化された通信手段ではどうも考えられない文字の喜びをここで知るようになるとは思ってもみなかった。

人が記憶するときは、文字だけではなく、筆跡も大きく影響するのだと思った。

“どうしても諦めなければならない恋と、持続していることを主張しなければならない恋とでは、どちらが苦しいのでしょうか。

比べる恋などひとつもないのに。

比べること自体が誤りであると理解していますが、それでもより苦しくない方を選びたいと思っているのに、自分のその状況が、より苦しい方であれば良いのにと思うのは、なぜでしょうか”

今日のはじまりは、そう書いた。

あらかじめ考えてきた言葉と違う結果になったことに、彩世は少しばかり困惑し同時に同じくらい満足していた。

この人の筆跡はどこか和ませる。

自分を惨めに思わせる言葉はすべて洗い流されて、そして彼女はとても至純の世界に生きている者になったのかとさえ錯覚させる。

それでいて、自分の成さなければならないことを思い出させる。いつも、最後にはこう書かれてあった。

“自分の路を進むあなたを想像しています”

そうだった。確かに、自分には思い描いた将来があって、そこに進むために今を生きているのだと思うから。

だから、この奇妙な文字の集いに溺れることはしなかった。余興だとも思わなかったけれども。

自分の短い人生の中で、出会いについて何かを思うのはほんの数回だということを知った。

それだけでも、周囲の者たちよりだいぶ違う価値観と持つことになった。それは優越感とは違っていた。少しばかり・・・はやく大人になってしまったと思った。

喪失感と引き替えに得た奇特な喜びに対して、彼女は貪り読むように文字を追った。

きっと・・・隣の席の人物は、何があったのだろうかと思っていることだろう。

隣の者と挨拶を交わすことを忘れて、彼女はひたすら、文字の相手に会いに来ているようなものなのだから。

また、今日も文字を追う。拙い彼女の文字に返される、美しい言葉に魅せられて、彼女は文字を目線で追う。聴覚より視覚が刺激される日々を送り、これほどまでに文字の魅力に取り憑かれて、それでもそこに沈むことができない自分を発見する。

彼女は目的があるから。

彼女は成さなければならないことがあるから。

彼女は・・・見極めなければならないことがあるから。

■06

自分は風変わりであると思う。

彩世は認める。

しかしそれは「自分は他者と違う」という傲慢な優越感ではなかった。

誰かと比べても仕方のないことだ。

他人に勝つより自分に勝つ方が先だった。

そういう風に思っていたら、いつの間にか、誰も彩世を理解しなくなった。

彼女が「誰もと違う部分」を持っていることを敏感に察知したからだ。

彼女ではなく周囲が鋭敏だった。

確かに、ひとりで行動することが好きだ。

そして静寂が好きだ。

だが誰とも一緒に居たくないということではなく、孤独さえ好むということであった。

そのことについて・・・周囲には理解しがたいと言われて久しかった。

だから、言わない。

それを声高に主張しないから、最近では誰も気がつかなかったけれども。

進学するときに、誓った。

友達が欲しいからそうしているのではない。

面倒だからだ。

それに・・・

自分一人だけが持つ、秘密という言葉に近い秘匿事項について甘い誘惑を感じていた。

だから彩世にはいくつか・・・どれほど近い間柄の者であっても漏らしていない事実がいくつかあった。

声高に、親しいことは共有の程度に比例しないと傲然と言った。

この戀もそうだった。

誰にも何も言わなかった。

戀をしていると漏らすこともなかった。

相手が・・・「どうして自分のことを公にしないのか」と言われて、戸惑った顔しかできなかった。

それに、浮かれた風情とは縁の無い淡々とした調子の彩世に、とうとう業を煮やして窘められたことが幾度かあった。

でも彼は辛抱強く待った。

彼女が彼に触れないのも。頬を合せるような近接さえ戸惑うことも。

すべてを待った。

彩世はそれを嬉しいと素直に知った。

それなのに。

彼女はそう言うのに、相手はただ哀しい顔をするばかりであった。

誰にも相談しなかった。

誰にも公言しなかった。

戀を詳らかにすることが大事なことだとは思えなかったから。

密かにすることが彼女の最も大事なものであるという証だと思ったから。

ただ、彩世はそれを相手に伝える手段を知らなかった。

気がついた時には、手段がないのだということを知っただけだった。

“恋は苦しい 戀はもっと苦しい”

そう書き記した。

どこかに何かを残さないと、あまりにも苦しかったから。

だから、自分に共感してもらえるような打算を含んだ言葉は刻まないことにした。

いつも呼んで貰っている以外の者の目に入るかもしれない。

いつか、誰かの目にとまって、これは消去されるべき文言なのかもしれないと考えながら、ここに訪れる。

何時も・・・翌日に訪れる彩世に必ず届けられる丁寧な筆跡に、彼女は微笑む。

他の者と違うのだ、と知ったことがあった。

恋と戀についてこうやって述べることを繰り返すうちに、彼女は単一のことだけを考える性質の者ではないのだと己を分析することができた。

・・・だから恋愛によって勉強がおろそかになることもなった。

自分の時間が摩耗していると思うこともなかった。

ただ、これまでのひとりきりであった時間に、誰か自分ではない別の者と過ごす時間が増えただけ。

それだけであった。

・・・こんな風に感じることもそのものが、もう、恋ではないのだと指摘されたことがあったが。

それもどこか映画や舞台のように、遠い声のように聞こえていた。

だから、彩世は自分が冷たい人間なのだと言われれば「そんなことはない」と否定する材料はないのだろうな、と思っていた。

「そんなことはない」と根拠のない否定ほど強い肯定はない。

そう思わざるを得ない。

彩世はまたひとつ、文字を刻むことにする。備品を汚損することは禁じられている。でも、ここに書くことなしには居られないのだ。自分の苦しみを。

それは日々更新される奇妙なやり取りであった。

夢中にはなりきれなかったけれど、それでも楽しみになった。

目的のひとつになった。

今日も、ここに来ようと思った。

勉強を疎かにするつもりはなかった。

けれども、何とも言えない物思いが彼女を幽なる世に誘うのだ。

いつも同じ様に、乱れることのない文字は彩世を出迎えた。

机の上にテキストや筆記用具を並べるふりをして、こっそり鞆で隠しながら眺めてから、鞆を机下の物入れにしまい込む。

そしてまたもう一度読む。

・・・短い文面であるのに、幾度も読み返すという行為を彩世は楽しんだ。

古来この国に伝わる歌のように読む都度、意味が違ってくるような気がした。

その文字を被う分厚いテキストのどんな長文より魅惑的だった。

“恋は目の前にない実体のないものを対象にすることもありました。戀はどうでしょうか。戀は、「心」と音を表す「繚」が重なっています。どうしようもなく音が出てしまいそうなほどに心が惹かれる対象は、あなたの目に見えないものかもしれません。”

彩世は返事を書いた。

“違うと反論できない言葉です。私は、本当は戀の対象である人物ではなく、相手との目に見えない何かを信じて惹かれているのかもしれません”

彼女は少しばかり気落ちしていた。

相手の言っていることに妙に納得できてしまったからだ。

恋を失いそうになった時は、これが恋であったと否定しがちになる。

本当の本物の恋はどこかにある、と信じてしまいたくなる。

でも、すでに彩世は自分のことを客観的に眺めることができた。

なるほど、と頷いてしまったのだ。

我を失うほどの恋情を感じて、数多聞く恋の苦悶に自分は居るのだと思っていたけれども。こうして、誰かに冷静に問われると果たしてそうだったのだろうかと考え込んでしまう。

戀は、疑ったらそこで終わりなのだ。

相手を疑うのではなく自分を疑った時にそれは音もなく消えてしまうのだと思った。

この人の言うことをそのまま信じれば、音引くほどに心惹かれるのが戀であるというのに。

確かに、心が惹かれた。

苦しくて、相手が目の前に居ないのに哀しくなったり心躍ったりした。

しかし、彩世は決してその文面を書き写すことはなかった。

忘れても、良いのだと思った。

文字のひとつひとつに彩世にとっては響き渡る深い意味があったが、その文字そのものを写すことは出来ないからだ。

髪が肩からこぼれ落ちて、机の上に広がった。

そして慌てて自分の髪を払った。

その文字が、彩世によって汚されるような気がしたから。

そうだった。

彼女はちょっとだけ溜息を落とす。

その吐息すら、その文字の上に乗るのが躊躇われた。

・・・こんな風に恋とか戀とかについて語れるほど自分は達観しきれていない。

そして筆記用具の中の、やや太めのシャープペンシルを取り出した。

かなり丈夫で使い込まれたそれは、彼女の手には余るほどの重さであった。

あの人と交換した品だった。

揃いのものを持つのは気が進まない、と言ったら、それを交換しようと言われて、それには応じる気になった。

『彩世は変わっているなあ、何も欲しがらない。』

そう笑われたけれども、ただ静かに微笑むだけしかできなかった。

でも、言葉が足りなかった。

共有するより、独占したかったのだ、と伝えられなかった。

同じものを持っていることを誰かに気がつかれるかもしれないという密やかな危険より、誰も知らなくてもその人の持ち物を持っているというささやかな秘密を持ちたかったのだ。

その筆記具で、終わりゆく戀への憧憬を書くのはどれほど愚かしいことなのか、わかっていたはずなのに。

ひとつひとつ、確認していく。

一日に、一文ずつだ。

世の中の流行のように、もの凄い速度で行き交う会話ではない。

そして、限りがあった。

この講習期間が終われば、問答も終わる。

“目に見えないからこそ、それなのに音を立てて引き寄せられるからこそ、それを戀というのだと思います。”

彩世はその言葉を目にしたとき。次に書く言葉を決めた。

■08

『最近、楽しそうね』

普段から寡黙であった彩世の口数がますます少なくなっていたことに、家族は気がついていた。年の近い妹は陽気でお喋り好きだ。

だから、何かと比較されがちであったが、不思議とうまが合った。

そんな妹でさえ、彩世の様子がおかしいことに心を痛めていたようであった。

家族にも内緒の密やかな恋愛とまでもいかない人間関係に、彼女が憂いを感じていることまではわからない。

けれども、何かがあったのだ、と思ったらしい。

その彩世が、どんなに寒い朝でも定刻通りに起き出し、身支度をして出掛けていく。

だから、浮かれていると指摘されて、彼女は振り返らずに、極力素っ気なく「そう？」と答えにならない短い言葉を発して家を出た。

彩世は静かに、コツコツと鳴り響く書き込みの音に気を配りながら、ひとつひとつを丁寧に書いた。

“目に見えないけれど、何も見えなくなるのが怖いと思ったとき。戀は静かに消えゆく瞬間を待つだけになるのだと思うのです”

しばらく受験で忙しいので、会えなくなる。

そう言われた時に、彼女は、「そう」とだけしか言えなかった。

それが体の良い拒絶の言葉だと知っていたからだ。

傍観者であった頃は、こんなやり取りに胸を痛める者達を眺めながら、なぜ、はっきりと断裁してやらないのだろう、と思ったものだった。

先を期待させる言葉や、自分は悪くなくて、環境や状況という外的要因にすべて責任があるという言い方は相手への思いやりがないと思った。

相手より別の何かを選んだのだから、と言えないのであるならば。

残酷な仕打ちだと思う。

終わらせることが出来ない戀ほど、苦しいものはなく、ずっと後にまで残るものなのだろう。

まだ、「ずっと後」を経験していないから、わからないけれども。

それでも、もう、元には戻らないということはわかっている。

どんなに声を聞きたいと思っても。

どんなに顔を見たいと思っても。

それを、相手に伝えることはもうできないのだということだけは理解できた。

はじまりは至って普通であった。

彩世の学校では、受験対策の補講が二年生のころから始まる。

すでに、この学年ですべての教育課程が終了していた。

学年全体の合同授業であったので、大講義室での授業となり、そこで一緒になった。そして、次にグループ毎の演習授業で同じ班になった。

至って簡単な経路であったけれども、彩世はしばらくの間、彼の名前すら覚えようとしなかった。必要ないからだ。

実習では、課題の答え合わせをする際に、グループ内で答案を交換し、採点する。

決まった答えを書くのではなく、どのようにしてその答えを導き出したのかという過程を重視する授業であった。

つまり、相手の思考を辿る作業だ。

人によっては、このような時間は無駄であるから、過去問題や予想問題に多く接していたいと言うが、彩世はこの時間が好きであった。

誰かの思考を読み取るのではなく、自分の思考を客観的に見つめられるからだ。

そして、誰もが彼女の答案を見て、何を考えているのか言い当てられなかった。

答えが合っているから、それで及第点だと言うばかりであった。

導いた過程を読む者はいない。

己のことだけで精一杯だったからだ。

未来が決まっていない状況は、酷く不安定だ。

特に、これからしばらくは自分との闘いになる。

加えて他者との闘いになる。

そんな中で、ひとりだけ、彼女の過程論述に目を留めた人物がいた。

それが、彼だった。

『綺麗な字だね』

今でも覚えている。最初の会話はそこから始まった。

そこに特別があったわけではない。

特別でないから、だからこそ、記憶を取り除くことが出来ない。

この学校では、互いにライバルにはならない。

皆、最高クラスの偏差値を維持し続けて居る。

切磋琢磨を励行されたけれども、ここの生徒達と競うのではなく、その他大勢の者達と競うのだと教えられた。

未来を約束された空間。

ランクに拘らなければ、どこにでも進学できる環境が備わっている場所。

彩世はそこに居ながら、淡々と過ごした。

答えが同じであれば、文字の美醜は問題ない。

それなのに、彩世の字を美しいと言った人がいた。

■09

だからかもしれない。

だから、この文字に拘るのかもしれない。

書き写すことはしなかった。

書き連ねることはできないから、これらを消去しなくてはならない。

本当に短い時間だけの命の文字だとわかっているのに返信を書いてくれるその人のことを考えると、無為に雑に消去することはできなかった。

じっと数分眺める。

文字の形を記憶し、意味を記憶する。

それらは脳の別の分野で各々保存される。

一日のうちで、一番集中するときだ。

これほど短い言葉なのに、その意味は深い。

彩世は思い返す度に、もっと違った言葉を書けば良かったと思ってしまう。

そうしたら、どんな賢答が戻ってくるのだろうか。

それを想像するだけでも楽しかった。

決して・・・あの人の文字と似通っているわけではないから、まったくの第三者であった。

この文字は、彩世の知らない人であった。

こんなに綺麗な文字を書く人を見たことがなかった。

しかし、その相手を探すことはしなかった。

おそらく、夜間授業でここに座って居るのだろう。

調べればわかることなのかもしれない。けれども、そうしなかった。

根拠はないが、この人はそれを望んでいないような気がした。

夜間コースはすでに高等学校を卒業した者・・・つまり、浪人生の受講率が高い応用コースがほとんどであった。しかし、これほど綺麗な文字を書き、教養と言っては惜しいほどの文字を紡ぐ人物が浪人生であると言うのは納得できなかった。

そして、彩世はそこで思考を止める。

詮索は好まない。

相手も好んでいないと思う。

なぜなら、相手も彼女を探さないし、どのコースを受講しているかが一目瞭然であるアルファベットと現役生と浪人生を区別する末尾の籍番号を明かしてしまえば、彩世の身元は判明してしまう。

でも、そういったことは書かれていなかった。

だからこそ、こんな風に素直に気持ちを落とすことが出来たのだろうと思う。

文字を落とすことの意味について、考える。

大人になれば、筆跡は個人を表すことになる。

でも、彩世はまだ大人になりきれしていない。

だから、彩世の表す紋様が責任を持つことはなかった。

それが良いことではなく、寂しいことなのだと、彼女はわかっていたのだけれども。

それでも、この人の言霊に耳を傾ける衝動を無視することは出来ない。

知らない相手だから、勝手気儘に意見することができる。

彩世は、それを承知していた。

だからこそ、彼女はその文字に浸れるのだと思った。

純粹に、文字の造形や意味に浸ることが出来るから。

だから、その文字は特別なのだと思った。

“離れた場所に居るからこそ、戀の利害得失について感じることもあるのかと思います。すべてではないのですが”

残り少ない時間の中で、彼女はそう書いた。

あと、数日でこの講習は終わる。

朝の寒気も、構内の静けさも。

皆、終わる。

年が明ければ、試験対策でここは賑わう。

彩世はその賑わいを受け入れることができずに、この講習でこの場所に来ることを終える。

未来を信じて、現役もそうでない者も一斉に集う場所の気配を感じるのは、これで最後だった。

自分は・・・何を求めてここにやって来たのだろうか。

彼女の在籍の学校であれば、ここで受講することに問題はなかった。

進学校の生徒に低額で受講させたり偏差のために模擬試験を受験させたりするのは、予備校の常套手段であった。

すでに学び終えてしまった内容であったけれども。

それでも、彼女はここを選んだ。

朝に出掛けられなくなるほど鬱屈した空気を漂わせたまま一日を過ごすより、自習室が完備された、個別ブースの充実した場所に来た方がより効果的だと思ったからだ。

しかし最近では寒さとこの月特有の気忙しいさのためなのか、自宅近くの図書館の自習室を利用するこ

とが多かった。

家族が皆、大らかで、細かいことを彩世に問うたりしないところが彼女の救いになった。

そして彼女は筆記具を握る。これは永遠に続かない。だから、書く。

■10

“戀の結末はひとつしかありません。最後はどのような形であっても終わるのですから。愚かしいこととはわかっていますが、引延してしまいます”

ここまで書いて、彼女はそれらを消去するかどうか躊躇った。

知性美あふれる文字の持ち主に、彼女は否定的なことばかり書いており、それに対して実に謙虚に実直に言葉を返すその人は、常に彼女を励ます言葉を書いていたからだ。

小さく細かく書くと、戀という文字が潰れてしまう。

でも、他の誰にも気がつかないほどの密やかなやり取りのために、彼女はそれまで遣っていた文具よりずっと細かく書くことの出来る先端の細い筆記具を使用するようになっていた。

あの人と交換したものではなかった。

告文（神仏に祈願の意を告げ奉る文のこと）のようであった。誰かに知られたり、漏らしたりすれば、終わりの見えているやり取りが中断されてしまう可能性があった。

・・・それでなくても、毎日、返答があるとは限らないというのに。

間もなく最終日を迎える。

誰も居ない冷えた教室で、彼女がひとり書くことに没頭できる時間は僅かであった。

相手が、自分と同じだけの時間を割いているとは限らないのだが。

それでも、同じ様に受け取った言葉を咀嚼し、次に紡ぐ言葉を組み立てる喜びを、その人は知っていると思った。

彼女が受講している時間、そのことだけを考えることはできなかった。

長い時間そうしてきた習慣であるのかもしれない。既に聞き覚えた内容であっても、新しい発見と人の思考の過程を知ることができる時間を貴重だと思っていた。

このことの為だけに費やす瞬間は短い。

それでも彼女はこの時間のために、厭わずにやって来ることが出来る。

だから。書き直すことを躊躇った。

前日から考えた言葉を返すことが出来ないから。

何度も書き直して推敲すればもっと気の利いた言葉を書くことが出来るのかもしれない。

でも、それは望んでいないのだろうと思った。

大規模な教室の片隅に残される文字を書いている人も、彼女と同じ様に、未来に向かって歩こうとし

ている人だからだ。目標は同じだろう。

でも、それでも何気なく書いた彩世の言葉に反応し、言葉を残していく人に真摯でありたかった。講義室は皆が熱心であるとは限らない。温度差がある。けれども、共通していることがある。皆、後ろを振り向かないのだ。

講師の話に耳を傾け、板書を写す。

最近では、サテライト授業やスクリーン投影のプレゼンテーション型の授業も多い。

正面に向かっているから、誰もが彩世の残す小さな文には気がつかない。

使用しているテキストの使用ページが進んだ。間もなく、この日々は終わる。

テキストへの書き込みでびっしりと埋められているテキストは、美しくない。

反復学習を推奨されているので、こういった書き込みは良くないこともわかっていた。

しかし、俯いて話だけを聞いていることもできなかつた。幾つか、同じ問題を学校の実習で扱ったが、その時の説明と違う部分を思い返してはメモを取った。

人の解釈とは、教える側でもこんなに違うものなのだと知る。嫌ではなかつた。そういうものなのだ、と思っていたからだ。

そう。

人の感じ方は、同じではない。

けれども、数学も英語も国語も物理も・・・彼女が高等学校で受けた教育は答えが決まっているものばかりであった。

ひとり、またひとりと受講生達が入ってきた。

一様に、室温に顔を顰めていた。

今朝、一段と冷えたからだ。

講義開始直前の自習室は満席であることが多い。

だから皆、早めに来て、空いた時間を自習にあてるのだ。混雑しているのに、遅れると奥まった席に座りづらいということもあつたが。

それが頹廢的な主観的価値観だとわかっていたけれども。

結局、消去しようと思切ることができなかつた。

タイミングを失ってしまった彩世は、今日の返信をそのままにすることにした。

・・・顔を上げると、いつの間にかかなりの人数がすでに集合していた。壁に掛けられた時計を見ると、開始時刻にはまだ余裕があつた。しかし、既に授業の準備を始めている講師や助手が入室していて、受講生達の質問に応じていた。

だからだろうか。

この講座が非常に人気があるというのは、こういう姿勢が好ましいと評判になったからだろう。

教育の側も、日々努力しなければ生き残れないと歎いていた講師が居たことを思い出した。彩世は、そっとテキストで机上の文言を覆った。

■11

忙しいから、時間が取れない。

あの人が必要な風に言うようになったのは、いつの頃からだろう。

最初を思い出すといつもの自分から逸脱することを認めざるを得ないので、彼女は最初を忘れることにした。

本当は、最初から最後まで覚えていたのに。

忘れたふりをすることにした。

それを彼が望んでいるとわかったから。

終わりが見えたから、秘匿を望んだのだろうか。

それとも。

終わりたくないから、緘黙を誓ったのだろうか。

最後、というものを認めるのが辛かった。

怖かった。

受け入れたくなかった。

忙しいけれども、時間を作るから。

そう言っていた台詞が、いつの間にか変わっていった。

溺れるような関係ではなかった。

互いに、誰にも打ち明けていなかった。

彼の方は、どうだったのか、結局のところはわからないが。

確認する必要もなかった。

そうする間もなく、彼が彩世と会わなくなったからだ。

電話が来るわけでもない。

尋ねに来るわけではない。

ふたりだけしか知らない方法で、連絡するわけでもない。

ここしばらくの共有空間は、図書館であった。

しかし自習室は個別ブースとなっており、彼女と顔を合わせながら同じ空気を楽しむという余裕はなかった。

空間を共有するだけだった。

はかどっているのか余裕が持っているのか聞きあうことさえしなかった。

ただ、来ているなど確認するだけ。

そして、帰りにさり気なく通りがかった軽く肩をたたいて帰る。

彼の方が先に帰っていく。

図書館で時間まで学習した後は、次の場所に向かっているからだ。

帰り道も別々であった。

並んで歩くこともできない。

会話することもできない。

それなら、同じ空間に居る必要はないのではないのか、とさえ思う。

けれども、そうできなかつた。

最善の策を知っていながら、そうできない。

これこそ、戀なのではないのだろうか。

それを伝えることもできなかつた。

彼が彩世と帰り道を一緒にしなかつた理由は聞かされていた。

この予備校に通っているからである。彼女と違う路に行くから、彼は彼女と行動を伴にしない。

だから、彩世はここに来ることに決めた。

同じ講座でなくても、ここに来て、受講すれば終わりの時間が同じであるからだ。

彼と彩世の進学希望コースは同じであつたから。

ひょっとすると同じ講座を受講できるかもしれない、という微かな期待があつた。

しかし膨大な受講者数を宣伝とするこの場所で、彼の姿を探すのは至難の業だつた。

直前対策コースのうち、何を受講するつもりなのか尋ねれば良いだけの話なのに。

彼女は、彼に問うことができなかつた。

特別だから、何もかもを免除されるのではないと思ひ知つた。

特別だと意識しているから・・・何も聞けないのだと思つた。

だから、自分で確認しようと思つた。

確認したかつたから。

彩世も同じタイムスケジュールを過ごすことで、確かめたかつた。

・・・本当に時間が取れないかどうかの是非について。

恋はすべてを凌駕するとは聞いていた。

どんな本を読んでも、誰に聞いても。皆がそう答える。

だから、彩世の恋は恋でも戀でもないのだと思わざるを得なかつた。

でも、彼女には適用できなかった。

皆に訪れる感情について、彼女が他者とかけ離れた結果しか持たないことを、誰も責めない。

けれども、誰も問わない。

それだけのことなのに。

■12

始まりは単純だ。

嬉しかったら。

ただ・・・嬉しかった。

それが、始まりだった。

話しかけられたことが嬉しかった。

彩世のことについて、誰も興味を持たなかったのに。

深く知ることと詳しく知るとは違う。

“戀と文字は似ています。

形を変えるところ。形を持たないところ。

そして人によって得るものが違うところ。

文字と戀は似ています。 “

彩世はこの文字を見た時。

人目を憚らず、大きな溜息を漏らした。

この空間では、こうして時折溜息を漏らす者に遭遇する確率が、街中のそれより非常に高い。

見通せない未来への歎息だと、周囲の者は思っただろう。

不安定な時期にさしかかっていた。

彩世が漏らした呼吸の循環過程から逸脱した呼気を気にする者は居ない。

誰もが進路への不安と吐息と思っただけに違いない。

でも実際には違っていた。苦しくなって・・・この文字を読むと苦しくなって、溜息を吐き出さずにはいられない。

絶え間なく不定期に訪れる嘆きに、彩世は戸惑った。

この人とのやり取りの中で、負の感情を連想させる言葉を書いたが、それでも具体的に、誰かの不幸を願う言葉を綴ることは躊躇われた。

けれども。

誰かが恋しいのか、とか。

誰かを哀しく思うのか、とか。

尋ねて欲しい布石を残している自分の浅ましさに辟易していたのは真実だった。

自分の心を見透かしたような言葉に、彼女は言葉を失った。

・・・生涯、忘れることはないだろう。

彩世の年齢で、生涯、という言葉は遠い未来や永遠を表す。

・・・叶わない夢について、いつか・・・彩世は胸を痛くすることも忘れてしまうのかもしれない。

でも、今は忘れないでおこうと思った。

形に残らないけれども。

形に残してはいけないのだろうけれども。

彩世はテキストを取り出した。

乱暴に机上に重ねてしまうことで、文字が薄れることが怖かったので、あえてそこには乗せなかった。

しかし、誰からも見えない位置になるように、人工的に積み上げていく彼女の私物がひどく空虚であるな、と思えて仕方が無かった。

でも。

彼女がこの席で受講している間は、この文字は生きている。消えることは無い。

・・・この文字を読むことの愉しみに待つようになった。

この文字を消さなければいけないということが、彼女に大変な煩悶となったことを伝える術はなかった。

だから誰よりもはやく来て、できるだけ長い時間その文字が永らえるようにする。誰かが気がついてしまうかもしれない。必ず次の返事が書かれているとは限らない。

誰が書いているのかもわからない文字に、心が躍る。戀の疼きや喘ぎを書いているというのに。

あの人と会わなくなっても、苦しくなっても文字にすることはしなかった。

残せば、もっと苦しくなると思ったからだ。

だからいつにも増して、勉強に打ち込んだ。

それ以外のことに没入することによって、湧き起こる虚無感と不安と焦燥を払いのけようとした。そしてそれは成功した。

ほんのひとときでも忘れていた瞬間が頻繁に増えた。

次に、その瞬間を継続できるようになった。

それができるようになると、どんどん長く続けることが出来るようになった。

ひとつずつ越えていくことすら普通になった時に、彼女は彼の文字を思い浮かべることが出来なくなっていた。

彼の書いた答案を見たし、ノートに書かれた文字をあれほど頻繁に見ていたというのに。

彼の文字が、思い出せなくなった。

そんな風に、目の前の文字も忘れてしまうのだろうか。

いや。それはない。忘れようと努力しても心の痛みが消えないのと同じ様に、形は忘れても、美しいと感じたことは忘れない。

家族にも言えない小さな嘆きを拾った相手の言葉に、今は和んでいる。

濁点のつけ方や、ひらがなのバランスが絶妙だった。これは書を学んだ者なのだろうと思われた。彩世はそれをじっと見つめた。

■13

“戀は苦しい。切ない。難しい。でも、理解できないと向き合うのをやめたら、本当に理解できなくなる。確かに、似ています”

満たされずにやりきれない思いが彼女を覆う。

それだけ書くと、彼女は壁掛けの時計を見上げた。

この文字を追っている時にはまったく周囲の気配に気がつかない。

それほど集中して見つめているのだ。

気がつけば、周囲の席はほとんど埋まっており、間もなく予鈴が天井に埋め込まれたスピーカーから流れ出てくるはずであった。

彩世が一点を凝視している様は自分で想像しても滑稽で奇妙であると承知していたので、彼女は問題編の文章を繰り返し読んでいる様子を装っていた。

びっしり問題が詰まったページを眺めているのであれば、手や体が動いていないのに机を見つめていても、おかしくない姿勢を用意した。

こめかみから頬にかかる髪が、彼女の目の動きを外に漏らすことを妨げて役に立った。

そして自分に対して嗤った。

ここまで来て、自分は愚かしくも他人から見られることに対策を立てるのだろうか。もう、誰にどう見られても良いのだと思いつつも、自分が誰にも見咎められないための方策を講じている矮小な行為を正当化したいだけではないのだろうか。そんな風に考えると、滑稽さが強調された。

最初。この文字の人にも言外に責められているような気がした。

お前は何をしているのだと叱られたのなら、それも受容できたのだろうかと思う。

すでに何度も読み返した文字列であった。

印刷されたそれらを眺めることは嫌いではない。

しかし、目の前に広がっている手書きの暖まる言葉の紡ぎには温度を感じる。

確かに、そうだった。理解できないと向かいあうのをやめてしまったら・・・彼女はずっと、大人になってもずっと後悔するのだろうかと思った。あの時にああしておけば良かったという気持ちは後悔と言う。後悔については、後から悔やむものだから存在を認めている。幾度も経験したことがあったからだ。

しかし、後悔するとわかっていることについて何もしないで居ることが彩世はできないのだろうかと自分を分析していた。

何もしないで通り過ぎることができなかった。

だから。

そして、ほぼ満席になった席に並ぶ受講生達の中に自分も埋まっているのだと改めて気がついた。皆、私語は一切発していないのに、人の気配というものはひしめき合うだけで騒がしかった。

顔を上げてみれば、すでに講師が助手と共に本日の追加テキストを配っていた。この授業は進度が速い。

授業の後半では前日に課された独自の演習問題を使った解説が盛り込まれていた。

大変によくできた教材で、毎年同じ内容を使い回す傾向がある講師たちのそれらとは違って、前年度の傾向と対策が分析されて、解説を読むだけでも読み応えのあるボリュームのある小冊子であった。

そのテキスト欲しさに受講する生徒に複写を求める者が続出するくらいであった。

開始直前のマイクテストであったり紙の擦れる音であったり・・・奇妙な空間に立ち上る緊張感が彩世には身に染みた。

・・・彼女は居住まいを正して、授業に入る準備を整えようとした。電子辞書の使用が認められているが、彩世の学校では辞書の携帯以外は認められていなかった。だから、使い込んだ辞書を取り出してノートの白紙のページのひとつ前に目を落とす。前回何をやったか、その続きから始めることが常であるからだ。

毎回授業に出てこない者には理解できないから、脱落して出席してこなくなる者が出るかと思ったが、この講座は違っていた。

この文字の人も、この後の講義を受けているのだろうか・・・同じ様に溜息を漏らしテキストを受け取り、ノートを広げているのだろうか。

座席指定制であるので、おそらく同じ席に座っているのだろう。

そう考えると何だか面映ゆかった。体を僅かに揺すって、ひだのついたスカートを伸ばして膝を整えた。姿勢悪く座って居ることが気恥ずかしく思えた。

そして、いつものとおり・・・彼女は彼女が習得した方法で授業を迎えることにする。

集中するための入り口に自らを立たせる。

そのために、決まった位置に決まった文具を置く。

辞書を授業中に使うことはほとんど無いが、長年の習慣で机上に出しておく落ち着いた。

その分、彩世の目の前のスペースが少なくなるので、工夫して、極力多くのものを出しっ放しにしないように整頓を心がけていた。

彼女は書かれた文字を消去しても、その上に自分の言葉を書き潰すことはしなかった。文字のあった

場所の少し下方に自分の文字を書くことにした。

何となく、神聖視していたのかもしれない。

痴がましく凶々しい者だと思われたくない、と自分に理由を作った。

動機は作れないが理由は作れるのだ。

■14

その時。

慌ただしく室内に駆け込む音がしたので、彩世は顔を上げた。

入り口は講師の立つ壇上の両脇に設置されている。

授業開始まではそこは開かれており、閉められているということは入室を不可としているからで、出ることはできても入ることはできない。

施錠こそされていないが、それは暗黙のルールだった。

この講座は途中入室が許可されていない。

こちらが費用を払って受講しているのだから、それは不当であると誰かが漏らしていたが、他の受講者の集中力が欠けるのであれば、それは適正な指示であるという判断が下された。

だから誰もが時間に余裕をもって入室する。

ざわりとした騒がしさの波が一瞬だけ湧き起こった。同時に始まりのブザーが鳴り響き、遅参加者は時間内に入室するというただひとつの課題を乗り越えたのだ。

走って来たのだろう。

彼は、厚手のダッフルコートを着ていたが、長身のために酷く目立った。

外は寒いのに、暑そうに胸元を緩めて、大股で自分に割り当てられた席に向かって行く姿には、間に合ったという安堵が浮かんでいた。

そして軽く頭を下げながら、一列に並んだ席のうち、自分の席に座るために他の受講生の移動を小声で依頼していた。

毎日同じ席に座っていれば、同じ列であれば自然と顔くらいは覚えるものだ。けれども、見慣れない顔に、皆が怪訝そうな顔をしていたのが後ろの席から見えた。

そして、直前に配布されるテキストを受け取ることができなかつたので、講師助手が席の近くまで行き、手渡しされていたが、それはいつ使用するものであるのか、要領を得ていないようだった。

そして、彩世の近くで小さな揶揄が飛び交った。

「女連れかよ・・・余裕だね」

皆が言葉は違えども、同じようなことを言った。

この場の雰囲気を読み込めていないその人物に向かって、刺すような、笑罵の視線を向けていることに気がついていない様子だった。

上着を脱ぐために肩を大きく揺らしているが、その上着の裾を持ち、狭い席で介助している華奢な手首を眺めながら、彩世は黙ってその様子を見つめていた。

ここの受講番号は、受付番号順に採番されていく。

つまり、彼らは前後で申し込みを行い、そして知り合いなのだ。

一緒に申し込んだ仲であるということはすぐにわかった。

テキストのページを指定して、今日はここからだ教える彼女の二の腕は、彼に近い場所にあった。それほど窮屈な席ではなかったのに。

彼は胸元から受講証を出して・・・机に置いた。大きな鞆には、参考書や問題集や辞書が入っているのだろう。重そうに肩からおろすと、彼は周囲の視線を無視しながら必要なものを取り出し始めていた。真新しいテキストや教材が見えた。彩世のそれと明らかに違っていた。

彼女のテキストは何度も読み込み、おまけに書き込みもしてあるので、既に真新しい整った形をしていない。

・・・それで事情がわかった。

彩世は後ろの席に座っているが、一度も姿を見かけたことがなかったのは、彼がこの講座に出席していないからであった。ずっと空席だったので、気がつかなかっただけであった。今日、初めて出席したのだろう。

理由もわかっていた。

この時間の一つ前の講座に、同じ様に受講申し込みが抽選になるほどの人気の講座があった。現役生だけではなく、浪人生も多くその講座を希望するからだ。その講座は延長するのが有名な講師によるもので、毎回必ずといって良い程、終了時間を越える。

だから、連続してこちらの講座を受講することはできても、入室できないために今まで出席できなかったのだろう。

今日は駆け込んでようやく間に合ったということなのだろう。

彼が取り出した筆記具には見覚えがあった。彼女が差し出したものであったから。機能性を重視した重みのあるそれをたいそう気に入って、彩世が苦笑するほどの使用頻度であった。

無神経な人だな、と思った。隣の席に座る彼女は気がつかないのかもしれないが、気がついたらどうするつもりであるのだろう。

制服を着た彼女は、薄く化粧をしていて、彩世とはまるで違う雰囲気を持っていた。

小さく何かを囁いて、屈託無く笑う横顔が見えた。

きっと、明るくて朗らかで・・・彩世のように陰鬱で言葉が少ないと窘められることはないくらい、話し好きなのだろう。

講座を多く取ったから、会えないんだ。

そう言っていたのに。

確かに、彼は嘘を言っていなかった。

けれども、それを聞いたのは最近のことではなく・・・一体、いつのことだったのだろうか。それすら、思い返せなくなってしまっていた。

その場をすぐに離れるということもできなかった。

ただ、座って居るだけであった。

想像していたことを打ち消すために、彼の取っている講座と同じものを申し込んだ。

それなのに、彼女はそれを肯定する瞬間を見て、それほど自分が落胆していないことに落胆した。

彩世は、寄り添うふたつの背中をじっと見つめたままでいた。

遠くで、講師の流れるような声が聞こえてきた。

彼女はいつも通りに集中しようとして、机上に目を落とした。

でも、彩世が見つめていたのは教材の文字ではなかった。

机の端に書かれた文字を見つめているばかりであった。

■15

彩世が受講している講座は、この予備校では最も早い時間の講座であることは事実であった。

しかし、それは彩世が受講できる講座中、開始時間が最初のものであった。

・・・この予備校には、夜間のコースの他に、早朝コースがある。

生徒が多く集う理由がここにあった。

深夜の受講では効率が悪かった。

それに、青少年にかかる条例に抵触する時間帯を中心講座とすることはできないのが、現代の教育機関の悩ましい点であった。

苦肉の策として、早朝のコースを設けた。これが思ったより受講希望者が多く、抽選になるほどの希望者が出てしまったのだ。

受験生になる学年になると、1時限目は休講が多い。午後近い授業から開始されることが多かった。

これは、午前中に進路指導を行ったり、個別に補習を希望したりする者が多いからだ。午後の放課では、こういった大手の予備校に生徒が集まってしまう。

進学校は、補講を行うのは放課後と決まっていた。

教師の勤務体系がそれしか許されないからだ。

彩世の受けた、通常カリキュラムとしての補講とは違う。希望者だけを募る講座は必然的に午後に集中していた。だから、早朝の授業がもてはやされる。

最近の保護者は、夜遅くまで外出するより、朝早く出発する受験生を迎合する傾向にあった。

・・・だから、彩世の受ける講座は、朝一番ではないのだ。だから、この講座を受講する気になったのだが。

彼が、早朝コースを受講するので、彩世と会えないと言った時。

彩世は、同じ様に自分が申し込むことのできる講座で一番早い時間を希望する旨の申請書を出した。

時間が空けば、自習室や空いているスペースで待機すれば良いと考えていた。

そしてその通りに実行したのだ。

たまたま、彼女の受講する授業の使用教室が、その日の最初に使用する教室であった。

だから。

・・・どこで会えるのか、彼女は実験してみたのだ。

自習室かもしれない。

この人気講座かもしれない。

・・・それとも、早朝コースが終わった時間の人混みの中での再会かもしれない。

とにかく、彼女は賭けてみることにした。

忙しくて会えないという彼の言葉を覆すために。

時間が合わないのではなくて、合わそうとしないということを証明するために。彼女は、ここにやっ

て来たのだ。

・・・待ってくれと言われれば、待てた。しかし、彼はそう言わなかった。

彩世の淡々とした態度が、彼の心を蝕んだ。遠くに追いやってしまった。

世の中の恋愛道がわからない。理解できない。

妹や周囲の者に聞けば、わかったかもしれない。でも、秘密にしようと彼と誓ったから、彼女は誰にも聞けなかった。

こんな時に・・・どうやって戀を温め続けるのかという方法を知らなかった。

そうかもしれないな、と思った事が現実になった時。

人は、衝撃を受けて信じたくないと思うのかと想像していた。でも違った。

・・・やっぱりね、と思うのだ。

それは人の心が乱されることを回避するための、防御のひとつであった。

思わぬ事に無防備でいるより、どこかでそうなるかもしれないと予防策を講じていたという形式であれば、人は自分を繕うことができる。

彼女が受講することのできなかった講座を受けるからと彼は言い訳をした。

そして、彩世は・・・黙ってそれを受け入れたのだ。

終わりが近い戀の言葉は、酷く虚しかった。

それなのに、それに縋り付こうとする自分が惨めで卑しく感じられた。

だから。

終わりにするのではなく、終えられないからここに居る。

恋のためだけではない。

彩世には、この授業を受ける意義があった。彩世の高校は進学校だ。受講するだけで、この予備校にも利益がある。

受講生の統計偏差値が、彩世が居るだけで少し上がる。

彼女の成績であれば、模試も無料であったし、この受講コースも割安で受けることができた。

朝早く来ていた。空気の張り詰めた空間に入り込むことについてまったく違和感を覚えなかった。

彩世はいつも・・・混雑を避けて、時間をずらして登校していたから。

それを知っていた彼は、彼女のことを勤勉だと褒めたから。

少し深く掘り下げて考えれば、矛盾に気がついたのに。

彩世は、その存在を知りながら無視したのだ。

・・・彼女の思い通りにならない結末に導かれるからだ。

事実は目の前に提示されていたのに、彩世はそのことを受け入れなかった。・・・それがいけない

とは言わない。

誰も言わない。なぜなら、彩世の人生について誰も関与しないという環境に生息しているからだ。

■16

彼が、別の人を好きになったというのは、何となく感じていたことだった。

誰か他の人を好きになったということではなくて、彩世に感じていた感情が、薄らいでしまったのだと思った。だから彼は彩世を遠ざけていたのだ。

まだ、この年齢では面と向かってはっきりと嫌悪を表すことも、表されることにも慣れていなかった。けれども、それは、本当は話さなければならないことや通知しなければならないことを先送りにして良い理由にならなかった。

どうせなら、嫌いになってくれれば良かったのに。

大きく派手に喧嘩して、そのままわかり合えないわね、とお互いに納得できれば良かったのに。

でも、違った。

嫌いになったのではなくて、厭わしくなったのだと感じる瞬間が、幾度かあった。

そして、その次に、彼女に無関心になったのだ。

終わりを告げることなく、次の始まりに足を踏み入れた彼のことを不実と詰ることもできなかった。
・・・会ってくれなかったから。

なぜ、そんな風が変わってしまったのか、彩世は理由を知っていた。

でも、それは自分ではどうにもならないことだった。

何かできたとしても、彩世がそうすることで、彼は益々・・・彩世から離れて行ってしまいうだろう。

何をしても何もしなくても、彼の心は離れて行くばかりなのだ。

だからと言って事の成り行きを傍観していることができるほどの高みにいるわけではなかった。感情を上手に最適の瞬間に表出することは得手ではなかったが、それでも彼女の中でははっきりとした意識があった。彼は特別だった。彼女の中では・・・特別だったのだ。

他を意識できないくらいに。

他を意識しないとイケないくらいに。

消滅してしまえるほどの淡さであるのなら、自分はこれほどの計画は実行しなかつたらう、と思った。

普段何事にも淡泊な彩世がこれほどのことをするという事について、彼はまったく・・・彩世のことを理解していなかったのだ。

あれほど近い場所にいたのに、今も近い場所に着座しているのに、彼はまったく彩世に気がついて居

なかった。

彼と彼女の学校の制服は派手やかしさはなかったので、他の者たちに埋もれていたとしても・・・それでも、何かしら違和感を覚えることはなかったのだろうか。

・・・一度きりしか入室していなかったのだとしたら、仕方の無いことなのかもしれない。そう思うことにしたが、何とも言えない、やりきれなさだけが残った。

声も聞かせてくれなかった。顔を見せるだけでも良いからという努力もなかった。これは彼だけを責めるわけにはいかないと思ったが、それなら何にぶつければこれは怒りにも哀しみにもならないのだろうか、と考え続けた。

・・・彼女は、机の上で、ぎゅっと拳を握った。

自分が貪欲になっていることに気がついた。

何かに期待しなければ、何も感じることはなかったのに。

何かに期待してしまっているから、彼女は何かを感じているのだ。

皆、高額な受講料を支払い、懸命に前を向いている姿は、とても奇妙だった。

こういった場所では、皆が・・・前だけしか向いていないのだ。横も後ろも視線を移らせない。もし、彼が散漫な人間であったのなら、後方に座る彩世の姿や視線に気がついたのかもしれない。けれども、それはなかった。

彼が気にしているのは・・・隣席の者から伝わる温度だけであった。

勉強の場所での行為ではないと、眉を顰める者が居るだろうからという配慮を感じる程度であった。

彼の配慮は彼の周囲だけにしか及んでいなかったのだ。

隣席の者と彼との間には・・・そこには確かに彼の席の反対側に座る者とは違う、とても近い距離だけしかなかった。

彼女の中に虚無だけしか残らないか、と言ったら・・・実際はそうでなかったことに驚愕していた。これは、机上で言葉を交わすあの人に対して、自分の日頃の覚悟や予感をしたためていたからなのだ、と気がつくまでにはそれほど長い時間はかからなかった。

今、思い返してみると、相手の言葉は別れの予感を察知していた彩世への励ましの言葉そのものであった。

おそらく、相手も苦笑していたことだろうと思う。具体的に相談することを決してしない高慢な者が、本人は遠回しに自分の傷心をそれとわかならいような曖昧な文字にして書き殴っているようにしか思えない拙い叫びを見て・・・何と答えて良いのか、きっと困っていたのだろうと思った。

今の目の前に座って居る彼と、同じであった。周囲に配慮しているようで、手元しか見えていなかったのだ。彩世は溜息をついた。ひとつだけ。静かに。

■17

“はじまりはおわりのはじまりであるけれども、おわりはつぎのはじまりのはじまりです。”

最終日の言葉は、これだけであった。

ひとつひとつの文字の間隔が綺麗だな、と思った。

躊躇ったような書き方ではなかった。

それが彩世を微笑ませた。

すべてを平仮名で書いているところが、彼女を和ませた。

自分がどんな状況であったとしても、昼も夜も朝も規則的にやってくる。そして、彩世以外の者にとっては、今日は冬季講習の最終日であるという以外には変わりのない一日のはじまりであった。

・・・それでも、今日で終わる。

今日の彼女は、制服ではなかった。いつも彼女が訪れる時間に、いつもの通りにやって来たけれども・・・今日はいつも通りの自分の服を着ることにした。

質素すぎると妹に苦笑混じりに言われたけれども、これが普段の彼女の姿であった。

制服とあまり変わらなかった。ほつれのない膝下のスカートも綺麗に伸ばされたブラウスの衿も着ているだけでどこか安心した。着崩すことが流行していたけれども、彼女は納得できないことについては受け入れない主義であった。

そういったものに関しては、否定はしないが肯定もしなかった。

だから、今回のことも・・・納得しようと思っていた。納得するために用意したことであった。

彼女は、その文字を見て、そっと指先でそれを撫でた。

強く押し当てたわけではないのに、文字が滲んだので、彩世は慌てて指を離した。

柔らかい芯で書かれたそれは筆書きのようで、はらいがこの上なく美しかった。これほど綺麗な文字を書く人を彩世は知らなかった。

文字は人の心を表すと言うが、それは本当のことなのだろうと思った。

自分のためだけに・・・彩世に向けられて残された言葉の命が短いことが、ただ、残念であった。しかし誰かに無造作に徒書きとして消されてしまうには忍びなかった。

だから自分で消した。

・・・これは自分が病んでいるから、そんな暴挙を平然と実行できるのかもしれないとさえ思った。

誰かに消されてしまうくらいなら、自分で抹消した方が良く考えるのは、浅はかな独占欲であることは承知の上だった。

これまでの歴史の中で、そのような拙い欲求のために消えていったものが、どれほど多かったのだろう

うかと思わざるを得なかった。

前日に彩世は考え抜いて・・・結局文字を書き直した。

相手が彩世の言葉を目にするのは、今回と・・・最終日の今日だけであった。

あと二回あったが、あと二回しかなかった。

回数を数えたことはなかったが、限られた回数だけに拘るつもりはなかった。

会話に制限があることについて・・・最初はまったく考えていなかった。

けれども、あと幾回この美しい文字と言葉を見られるのだろうか、という疑問が、彩世の憤りや哀しみを縮小させた。

昨日の講義が終わったあと、彩世は声をかけることができなかった。

連れ立って、退室していく後ろ姿だけを見つめていた。

最後まで、動けなかった。自分の動きによって、彼がこちらに気がついてしまったらいけないと思ったようであった。

なぜ、自分が後ろめたいと思うのか・・・自分が誠意に反する行動をとったわけではないのに、それでも、彼女は後ろめたいと思った。

なぜなら、彼のことをずっと変わらぬ気持ちで居続けることができたのであれば、彼を非難することもできたのに。

彩世の中では・・・憧憬しか残っていなかったのだと思うと、それが彼女を切なくさせたのだ。

自分の中でも、何かが、変わってしまっていたことに対して、受け入れられなかったから。

だから・・・慥かめてみようと思ったのだ。

受け入れるために確かめるのか、受け入れられないことを確認するために確認するのか、どちらでももう良かった。

最終日ということもあって、受講生は少し早めに入室しているようであった。彩世が一人きりでいる時間は、ほとんどなかった。

なぜなら、今日は最初の日に提出してあった、論文添削の返却日であったからだ。ここが他の受講システムと異なっているものであった。

受講生に限られており、皆が欠席しない理由がここにあった。ひとつひとつに添削を入れ、その講評を最終日に発表する。思考経路の表し方や、陳述方法、それに帰結までに限られた文字数で表現する際の注意などが説明される。

・・・この講座の進行速度が他よりも速いのはそのためであった。最終日にこのような特別授業を設けるからだ。

そのことよりも、彩世は返事を書く言葉を考える一人きりの時間がなくなってしまったことに対して憂えていた。文字を紡ぐ瞬間が零れ落ちていくかのようにであった。始まりと終わりは表裏一体であるという言葉に、彼女は笑みを漏らしてしまう。

■18

いつもと同じではなかった。少なくとも彩世にとってはそうではなかった。

隣に座っていた受講生が、彩世の姿を見て、おや、という顔をしていた。彼女は気がつかないふりをしたが、それはひとりやふたりではなかった。

制服と私服の区別がつかないように、できるだけ制服に近い服装でやってきたのに、何かが・・・彩世の雰囲気少し違っていただろうか。相変わらず、机の上には場所を決めて設置してある文具や辞書などが並べられており、彩世だけしか知らない文字は隠れていたのも彼女がその面に集中していることは、誰も気がつかないはずであったのに。

・・・確かに、彩世は昨日までの日常で欠けているものや変更されているものがあった。でも、総量は同じであったはずなのに。

・・・それなのに、彩世には明らかに変化があったので、それを彼女自身が気づく前に周囲が気配を察知したというのは、興味深いことだ、と他人事のように思っていた彩世は、やがて・・・いつも空席であるあの場所の隣に座る受講生が入ってくるのを見かけた。

最終日で課題が少なかつたせいか、どこかリラックスした表情をしていた。制服を着崩しており、それほどくたびれていない鞆を持っていた。その日の気分やコートの風合いに合わせて鞆を変更しているようだった。彩世にはまったくそういった気配りや洒落っ気がなかったので、自分にはどうも摸倣できない気質だ、と思った。

丹念に髪を解いてきちんと肌の手入れも怠っていなかった。彼の姿を探していないのは、その前の時間に彼と話をしているからなのだろうな、と思った。今になって思った。確かに、その受講生は、華やかな外見に似合わずいつも遅刻する事無しに入室していたから・・・彩世は気がつかなかったのだ。

いつも空席であったあの場所の隣に座るその人が・・・彼の知り合いなのだという想像すらしていなかった。

しかし、配付資料の余部も出なかったということはその人物が彼の分まで・・・欠席した分まで受け取っていたことを意味していた。この講座は欠席者がほとんど居ないし、途中退室もない。だから、気がつかなかった。

配付資料は一列で決められた人数分小分けにされていつも配布されており、欠席者の人数を引いてから配布するという事はなかった。この時に受け取れなかった者はそれ以上の権利を主張することはできなかった。

高額授業料を払っているものの、出席した者と欠席した者と同じだけの享受できる付加価値についてはまったく認められていなかった。

・・・受験と同じだ。

自分が寝坊したとか、欠席したとかいうことに対して、容赦してもらえるほど寛容ではなかった。

公共機関の乱れや影響以外には遅参は認められていない。

だから、皆が・・・遅刻して入室してきた彼に、眉を顰めて非難の眼差しを送ったのだ。そのことに関して、彼はやむを得ない事情だと言って庇護しようとするのは、空席の隣に座って事情を聞いているあの一人だけなのだろうと思った。彩世も、彼でなければ、まったく考えようとしなかった。彼女だって、空席のままの権利放棄者に対しては無関心でいたのだから。

それまではまったく気にならなかったその他大勢の背中の中のひとりであったのに・・・彼女の綺麗な髪の毛が見える背中だけが、やけに光って見えた。

後ろから見る彩世からは、実際よりもずっと遠い距離に感じた。

もう、手が届かないのだろうな、と思った。

今朝、いつもの通りに自習室の前を通ったし・・・早朝コースの講義の声を流しながら彼女は廊下を渡ってきた。でも、とうとう、最終日まで彼に出会うことはなかった。

講座が始まる前は、このあたりにこの時間にいるかも知れないな、と気のない返事をしていただけども、本当に彩世がここに居るとは彼は考えていなかったのだろうと思った。

その場を取り繕うための、優しい嘘なのだと思えなかった自分を恥じ、そして幾度も・・・彼女は彼女のために宛てられた文字を思い返していた。

苦しいけれどもそれが戀であり、恋と違うところであり・・・これをどう受け入れるかによって彩世の目の前に広がる色が違ってくると教えてくれた言葉を思い返していた。

文字に色はないのに。香りも温度もないのに、どういうわけか、その文字はあたたかく、彩世の望んだ色が付されており・・・高雅な香りさえするようであった。なぜなのだろうか。自分の縫りがそんな風に思わせるのだろうか。そんなことを思いながら・・・最後の授業の予鈴が鳴ったので、彩世は顔を上げた。

・・・気がつけば、もう室内は満席で・・・あの席だけが空席であった。また、今日も来られなかったのだろう。今自習室や空き教室に行けば、彼の姿を見つけることができるのかもしれない。

この授業を放棄して、そんな風にして他を彷徨えば、案外呆気なく彼に会えたのかも知れなかった。

でも、自分は席を立たなかったのだ。

これが、彩世の選択なのだ、と実感した。

何かを放棄してまで彼の姿を求めて、行動することができなかった。

その代わりに、憤りや哀しみを美化するために、机上の文字に向かって自分を嘆く作業に没頭していたのだから。

・・・彼を責められるわけではないだろうな、と思った。

どうしようもなく彼を求めて涙を流し、もっと積極的に彼のことを大事に思っていると伝えれば、もっと違っていたのかも知れない。けれども「あの時、もしそうしていれば」という仮定は、決して実行したり、取り戻すことが出来ないのだから。

でも、恋をしていたのよ、と伝えることができなかった彩世は・・・このことだけは悔やんでいた。

恋をしているのよ、ではない。過去形でしか伝えられないから、それすら悔やまれた。

■19

魔法の言葉がそこにあったわけではなかった。とても冷静で静かな音楽のような言葉が紡がれていて、自分の頭の中で復唱することによってそれらは温度を持ったような気になった。

どういう知性や気品があればこんな風に・・・静かに言葉を出すことが出来る野だろうか、と思った。

今日、最後の言葉を書く。

この言葉を消すこともとても辛く感じた。明日には「続き」はやって来ない。

終わってしまったという始まりが始まるだけであった。

この人の言う通りだった。

そして、予鈴が鳴り終わると・・・いつもの通りの授業風景が広がってきた。

彼女は習慣で、背筋を正し背もたれから身体を離れた。こうして居た方が集中できた。足に力を入れて少し身体を前に寄せる。

同じくらいのタイミングで、提出用紙を持った講師の助手と、アルバイトらしき者たちが数人入ってきた。

壇上まで受講生が答案を引き取りに来ると混雑が予想されるので、受講番号だけが見えるように三つ折りにされた答案を回付すると言った。

列ごとに人数が決まっており、受講番号順に配席が決められているので問題があるとは思えなかった。

簡単な説明があった。

スキャナー付きのホワイトボードに番号順に回付されるので、自分の採点済み答案かどうかを確認すること、未提出の者は番号の読み上げはないこと、本日の受講後に採点に疑義がある者は講師質問受付簿に受講番号と名前を記載することなどの簡単な説明書きを簡条書きにして説明していた。

これだけの受講生のひとりひとりを採点するのは大変であったろうと思われたが、講師には採点専門のスタッフや補助手が居るので、まったく問題ないらしい。それでも、他の講師が行っていないことを継続して行っているというのは素晴らしいことだと思うし、これが講座の人気のひとつなのだろうな、と思った。

・・・回ってきた答案を見るまでもなかったが、他の者の答案を受け取ってはいけないと思い、彼女は自分の提出した、一度は手を離れた答案を受け取った。

きっちりと三つ折りされており、上部の受講番号と名前の欄だけが視認できるようになっていた。答案の両脇に細い実線が施されていたのは、この折りを入れるためだったのだと知った。

・・・点数は見なくてもわかっていた。

満点ではなかったが、かなりの高得点であった。

これは過去、彩世の学校の模試で出題された問題で、昨年の大学入試の際にもいくつかの学校で出題された問題であった。

けれども、解釈であったり言葉の言い回しが曖昧であるなど、小論文や論述に必要なテクニックが足りていなかったり、結論事態が違っているなどとして、目の前のホワイトボードに記された平均点はかなり低かった。

試験は満点を必要としていなかったから、合格水準点までの差点と自分に不足している強化点について考えておくように、という説明があった。

彩世は騒めく教室の中で、自分の答案を広げてみた。

この答案を提出した時の自分と、今の自分は違っていた。なるほど、ところどころ修正された部分には細かく赤字でコメントが入っていて、時間をかけて受講生の傾向を推し量ろうとしている講師の姿勢が窺えた。

最も、これらのコメント付けは皆、助手や補助者のものになるので、講師の発案ではあろうが、決して講師そのものからの言葉ではないのだとわかっていても嬉しいものであった。

世界でひとつしかない、自分だけの答案である。そしてこれ以降、受験に関して言えば、どんなに同じ問題を解いて回答したとしても一度提出してしまえば、それは決して自分の元には戻ってこないのだ。

今、もう一度問題を解いてみろと言われたら、彩世はもっと違う答えを書いているように思えた。

・・・これで最終日なのだな、と改めて感じた。

明日からは寒い朝に早起きすることもないし、制服に袖を通すこともないだろう。

受取人がいない答案は、後で講師室に受け取りに来るように掲示板に掲示している旨の説明があったが、居ない者に対するアナウンスをここで行っても仕方が無いのに、という声も聞こえてきて、彩世はなるほどな、と思った。けれどもそれが・・・本人でないから答案を代理で受け取ることはできないと断られている、空席の隣に座る彼女への説明であると思ったので、彩世は微笑むことができなかった。

答案の受け取りを託されているほど、その人物は信頼されているのだと思うと、少しばかり胸が疼いた。

・・・彩世の最後の日が始まる。そして、この講座は終わる。

この人の言う通りだ。

始まりは終わりの始まりで、終わりは次の始まりの始まりだ。

そう思うと、この講座に来て良かったのかな、と思った。

誰にも何も相談しないで実行した。それが良かったのか悪かったのか・・・わからない。でも、コートの下に着ている制服を脱いで、今日はあの人からもらった筆記具を使わなかった。

捨てたり、持って来ないでいたりすることは、とうとうできなかつたけれども、随分な進歩だと思った。

どんな結果になったとしても、あれは彼女の宝物であり、記念の品であることには変わりがないのだから。

・・・彼女は、机上の文字をじっと見ていた。

そしてすぐに、講師が入ってきて、最後の講義を始める、と言うまで、その文字に対する返答をどうすべきか、考え続けていた。

いつもなら、冷え切った教室であつたのに、今日はどういうわけか少しだけ温かいように感じた。

■20

・・・冷え切った教室には、もう誰も居なかった。

間もなく、この予備校全体の照明が落ちる。全員退室するようにアナウンスが聞こえてきた。

予備校の夜は遅い。朝も早い、夜も遅かった。

夜間コースの生徒達がいるからだ。

現役生だけ、卒業生だけと区分けすることなく受講させることによって受講生の発奮を促す校風を重視している、致し方ないことではあったが、それでも予備校の一日は長いと思った。

今日は特に最終日であり、明日は全館点検日であったので誰も入館できなくなる。

だから忘れ物がないかどうか、翌朝の自習室を先取りしようとして帰りがけに自分の私物を自習室の自由席に設置していく者が居ないかどうかの見回りが入念に始まった。

そして、吐息が白くなるほど冷えた空気さえ見えない闇の教室の中で、人の気配がしたので、ぎくりとして一度だけ足を止めたが、あってはならない気配であったので、軽く首を振った。

けれども、それが気のせいではないことに気がついた。

かたり、と何かが落ちる音がしたのだ。

硬質の音だった。静かな教室に響き渡った。

・・・入り口の照明パネルに手を伸ばし、照明の電源を入れた。

「・・・・・・本当にいるとは思わなかった」

その人物は、声を漏らした。かなり、驚いていた。

彼女の姿を見つけて、口を噤んだ。

彩世は、寒さのために身を震わせながら、コートの中に身体を埋めて、座って居た。

彩世の顔色は青白かった。

一体、いつから待っていたのだろう。

少なくとも、受講生達がそのまま居残って騒がないようにするために不必要な場所での暖房を切つてから、相当時間経過して教室が冷え込むまで居たのだろうと思った。

「終わるまで待ちます、と伝言しました」

彼女の声は震えていた。

そして、足元に転がっている筆記具が、先ほどの音の主だと気がつくと・・・その人物は大股で通路を歩き、屈み込んでその冷たくなってしまった筆記具を取り上げた。・・・それも冷たかった。指先から自分の温度が抜けていくようだった。

彼女は機敏に立ち上がってそれを拾い上げることにできないほどに冷えてしまっているのだろうと思った。

「・・・医務室に行く？」

「いいえ」

彼女の声は固かった。

「いつからここに居たの？」

「最後の授業が終わってから、です」

かなりの時間、ここに居たことになる。相当寒かったはずだった。

彼女はその人物の顔を見て、少し笑った。

「大丈夫です。今日はそのつもりで・・・寒さ対策をしてきたんです」

それで制服ではなかったのか。その人物は納得したように頷いた。

それでも、かなりの冷え込みであったし、外はすでに真っ暗であった。

彩世が早朝のコースのみに出席しているのであれば、相当な時間をここで費やしていることになる。

その人は、拾い上げた筆記具を座って居る彼女の目の前の机の上に置いた。

机の上には何も置いて居らず、書き込みされた文字は綺麗に消えていた。

その時に見えたが、机上の隅に書かれていた最後の彼女の言葉も消去されていた。

“本日、最終講座が終わった時に、教室でお待ちしております”

それが彼女の言葉だった。もっと早く最終講座が終わると思ったのだろう。それでも、彼女は来ると信じて待っていたのだ。

「本日」が「今日」であるかどうかを知っているのは、その人物と彩世だけである。しかも、その人物は彩世の言葉を消去しにここにやって来たのだから、疑いようがなかった。・・・この人が『あの人』なのだ。

彩世は唇を横に引いた。

血の気の失せた顔をしていたが、具合が悪いということではなさそうだった。

彼女の理知的な顔が見えた。彩世は座ったまま、その人物を見上げた。

「あなただったのですね」

「その様子だと、予想していたようだけれども」

彩世は小さく頷いた。

「最初から、ではありません。確信は持てなかった」

彼女は呟くようにそう言った。

そしてじっとすべてが消された机の上を見て、眩しさにまだ慣れないように少し目を細めて、彼女は俯きながらもう一度、言った。

「・・・あなただったのですね」

■21

「二度目だね、あなたの筆記具を拾うのは」

そう言って笑った。

彩世はぼそぼそと小さい声で頬を染めて答える。

膝の上で拳を握り、肩を持ち上げていた。

「私は私を『あなた』と言う人を、ふたりしか知りませんでした。ひとりは『あなた』。それから・・・この机の上に文字を残して私を励ましてくれた人です」

「よく覚えていたね」

はい、と彩世は頷いた。

「もっと早く気がつけば良かった」

気がつかなくて当然だよ、とその人は言った。

「数字しか書いていなかったのだから」

そうであった。

板上に書かれた時間配分の数字や、受講番号の割り振りの数字しか見ていなかったから、気がつかなかったのだ。

『これ、あなたの大事な物でしょう？』

忘れるわけはなかった。

そう言って彼女が試験中に落としてしまった筆記具を拾ったのが、その人であったのだから。

試験中は不審な行動は慎むようにと言われていた。大事な・・・あの人から貰った筆記具をうっかり落としてしまったのだ。答案を見直している最中のことであり、書き直しがなければ、終時の合図を待ってから床を眺めればどこかにあることはわかっていたが、それでも・・・いつも一緒に傍置いていた物が手元から急に消え失せてしまったので、不安顔をしていたところに、その人が拾い上げてくれたのだ。

気がつかないように、できるだけ落ち着いているつもりだったのに。

それなのに、その人は気がついて・・・拾ってくれたのだ。そして彩世に渡した。

あなたの大事なものなのではないかと尋ねた。

持ち物なのではないかと尋ねなかった。それがいかに大切なものなのか、瞬時に悟ったのだ。表情乏しい彩世の不安を読み取ってくれた人だった。

「どこで確信したのか聞いてもよいでしょうか」

そう尋ねられて、彩世は少し言葉に詰まった。

「答案です。・・・私の名前が修正してありました」

今日、配られた答案には受講番号と名前を記入する。その時の名前が、赤字で修正してあったのだ。

しかも、彩世が今まで見詰め続けた・・・あの、美しい文字が乗っていたので、彼女は愕然としたのだ。

「私がこの教室をその日一番に使うことを知っている人しか、この文字は書けないと思いました。今日、確認したのですけれども・・・最後の授業まで、この席には誰も座らない。後ろの席からではなく、前の席から受講生を埋めていくからです。

・・・あの講座だけが、定員ぎりぎりのために、後ろの席を使う。

そうなると、受講生がこれを書いているのではないとわかりました。でも、そうなると私の受講時間を知っていて、ここに文字を書く事ができて、自由に出入りできる人というのは限られて来る・・・」

彼女はそこでその人を見上げた。

決して会話することのなかった人物が・・・微笑んでいた。

確かに、彼女は受講生では一番に教室に入っていた。

けれども、受講生以外では、他にも居たのだ。

・・・そう、授業を準備するための助手が、居たのだ。

スライド投影のためのスクリーン設置や、サテライト通信の回線接続テストを行うために、その人物は・・・彩世が入るか入らないかの頃から、そこに出入りしていたではないか。

彩世は溜息をついた。

なぜ、気がつかなかったのだろう。

なぜ、思い出さなかったのだろう。

この人とは初対面ではなかったのだ。

「・・・僕も気がつかなかったよ。最初は」

その人はそう言って含み笑いを漏らした。

「答案を採点している時、高得点の受講生が幾人か居て、すでに解いたことのある過去問題なのだな、と思いました。その中の一人に、あなたが居て・・・名前を見てみると、僕が一度見たことのある答案の名前と同じだった」

・・・答案は講座が始まる前に提出しなければいけないものであった。彼女はその時に・・・うっかり、本名を書いてしまっていたのだ。しかし、提出した後になって気がついたものの、受講番号で管理されているこの予備校で氏名の誤記は見逃されるだろう、と思ったのだ。気がつく人物が居るとは思わなかった。それを本来の申し込んだ時の名前に修正された答案が戻って来たので・・・彼女は

それで確信したのだ。

そして、最後の文字を決めた。決して会うことはないだろうと思っていたのに。いつもと違う手順で、強引かもしれないし押し付けがましい申し出故に会ってくれないかもしれないと思ったけれども。彼女は、賭けてみることにしたのだ。

■22

「ここは人気講座なので、申し込みを代理で行うことができないように、受講番号と名前の確認は必須なので」

彼はそのように言った。

綺麗な立ち方をする人で、きちんとした格好をしていた。アルバイトと言えどもスーツを着用することになっているので、雰囲気は違っていた。

・・・それで最初は気がつかなかったのだ。

「身分を偽って受講したとなると、途中で、不正受講者として、以後受講不可になりますよ。・・・

・・・まあ、あなたの場合にはそうであったとしてもまったく問題ないのでしょうかけれども」

「私の受講しているものは、これだけです。・・・だからもう今日で終わりです」

彼はまったく怒っている様子ではなかった。最初から・・・彩世の身分を知っていたのだ。

「・・・あれは、妹の名前です」

答案で修正されていた名前は、彩世のひとつ下の妹の名前であった。彼女は彩世と同じ高校で、今年受験を控えているが、推薦入学が決まっていて、今は家でのおんびりアルバイトを楽しみながら、寛いでいる。

「制服を着ていなければ、わからなかった。・・・あの日も、あなたは制服を着ていたから」

恥ずかしそうに、彼女はまた俯いた。

「・・・高得点だったのは、高校時代に一度、そして入試の時に一度、その問題を解いているからです」

彩世にとって、それは三度目であったから。

何が問われているのか、何を回答すればよいのか、わかっていたのだ。

「試験の時の要領で、自分の本名を書いてしまったわけですね」

すみません、と彩世が申し訳なさそうに言った。

「謝る必要はないですよ。学科変更の為に、大学在籍者でもここに通う者が居ないわけではないのだから」

「でも、私が受けなければ、もうひとり、別の人を受けられたはずなのです」

「そう思うからこそ、律儀に最後まで通い、予習を怠らなかったのでしょうか？」

彼に出会ったのは、大学入試の時だった。

入試の時間の些細な接触であった。試験監督補助は皆若かった。

そして、試験監督は大学の助教授や講師であることが多く、補助者は大学の学生であることを知ったのは、大学に入学して、今冬のことであった。

学内で、そういったアルバイトがあるのを知ったが、その時はあの時のあの人は皆、上級生だったのだと思っただけであった。

その彼が、なぜここに居るのか・・・不思議そうな顔をしていた彩世に、彼は説明した。

「大学院進学も、卒論の提出も卒業も見通しがついて・・・僕はこの予備校でアルバイトで助手をすることになりました。今が稼ぎ時だと言っている予備校は人使いが荒くて・・・こうして朝から晩までここに入り浸っている生活を年明け少しくらいまで続けることになって、少し憂鬱でした。あなたを見つけるまでは」

彼は笑った。

彩世のかじかんだ指がまた強く握られたので、彼は申し訳なさそうに言った。

「こんな時間まで待たせてしまって申し訳ない」

「いいんです。・・・来てくれましたから」

彼女は首を振った。

彼は彩世を軽蔑しているだろうか。

高校を卒業し、大学に入った彩世と浪人してしまった彼の距離は開くばかりであった。新しい生活の話をすることもなく、彼のことを気遣って会わない努力をした。

予備校で忙しいから、と言われた。

冬季講習は、人気の講座ばかりを受講するので、彩世と会っている時間はないと言われた。

けれども・・・彼から連絡がほとんどなくなってしまったことに対して・・・彼女は、彼の通う予備校に居れば、彼に会えるのではないのかと思ったのだ。

愚かな考えであった。

受験学年である妹の名前を騙り、選抜試験を受けた。

一度学んだことであったので、あっさりを受講許可が下りて・・・かつ進学校でもある彩世の出身校であるということが、人気講座を受講する許可証になった。

本当は、彩世が受講しなければ、希望する本当にこの講座が必要な人がひとり、受講できたのに。

彩世は特別受講枠であるので、一般の受講者の三分の一程度の受講料でよく、彼女の蓄えから出すことのできる金額の範囲内であった。その代わりに、後ろの席をあてがわれ、前の席・・・つまりもともと文字がよく見える位置に座る者とは差をつけられる。それは仕方の無いことであつたし、そのことによって・・・目の前の人物の書く文字になかなか気がつかなかった。

彩世が制服で現れたのは、彼がこの制服に・・・自分の母校の制服に気がついてくれるだろうかという期待があつたからだ。私服の彩世を、彼はほとんど知らなかったから。教室内があたたまるまでの時間、どんなに寒くてもコートを着込むことがなかったのは、彼女に気がついて欲しかったからだ。・・・でも、彼はとうとう・・・一度きりしか入室しなかった。そして座った先は・・・彩世の知らない世界の席であった。前の方の・・・一般枠であった。

■23

彼女が自分の学習スタイルを変更しなかったのは、それで合格していたからだった。方法を変更することで未来が変わらない立場にあったから。

「あなたが、誰かを探しているらしいというのは、すぐにわかりました。毎日欠かさずに一番にやってきて、予習はすでに終わっている。それなのに、入って来る人々の顔を見てばかりいる。誰かを、探しているのだろうか、と思いました」

彼はそう言って笑った。

男性なのに、美しい文字を書く人は、こうして近くで見ると、彩世が気後れするくらい素敵な人だった。

遠く離れた場所からでしか見ていなかったが・・・一年経過して、覚えている彼の姿よりももっと・・・大人の男性を感じた。

彼は笑った。

「見たことのある名前答案を採点していて、筆跡に見覚えがあった。そして、名前にも。次に、どの席に座っている人だろうと思って見てみると、同じ大学に通っているはずなのに、制服を着ている。・・・そしてその人は、苦しい顔をして机に・・・僕が以前拾った筆記具を使いながら、なにやら書き込んでいる。興味を持たないでいろ、という方が無理だよ」

それで皆が居なくなる時間を見はからい、彩世の文字を見て、そしてその返事を書くようになったと言った。

その時には、気恥ずかしそうに彼は自分の髪に指を入れた。

「・・・他の人に見せたくなかったんだ」

授業が終わると、片付けを装ってすぐに読みに行き、文字を消して・・・夜、最後の見回りの時間に文字を連ねた。

彼は、種明かしをした。

誰も座っていないとわかっていたが、それでも・・・慌てていたんだ、と言った。

「・・・その人と話をしてきました。つい、先ほど」

彩世は告解めいた口調で言った。

欠席者の答案を返却するには、講師控え室の窓口で受け取らなければならない。

明日からはしばし休講であるので、貰い受けるには今日であろうと思っていたので、彩世は講師控え室の前で・・・待っていたのだ。彼が現れるのを。

彼は彩世の姿を見かけると、一瞬、ぎよっとしたように目を見開いた。けれども、隣に並んで歩いていた人物に、先に行ってくれと声をかけると・・・彩世の前に立った。そして少し話をしようと言

った。

彩世にとっては、それで十分であった。答案を先に貰い受けてよいかと、彼は聞かなかったからだ。先に、彩世との問題を解決しようとした。だから、もう、良いよ、と言ったのだ。

彼が、隣に並んで歩く彼女が不安そうな顔をしたのにこたえて、彼女の肩を、ぽんと軽く叩いた時に・・・彩世はそれで終わったと思ったのだ。

『プラトンの言葉を知っている？“戀に肩を叩かれる”って言葉』

『プラトニックの語源だね』

そんな会話を思い出していた。

・・・彼は彩世ではない者の肩を叩いたのだ。

一緒に過ごす時間が長くそれを共有するだけが戀ではない。

でも。彩世と彼の共有する時間はもう、更新されないのだと思った。

彩世は自分の答案を彼に差し出した。そして、彼女が取ったノートも渡した。

「これ、もう、私はいらないから。受験対策に使って」

模範解答を書き込んでおいた。それを使ってくれ、と言った。

・・・彩世がいる大学ではその問題は二度と使われることはない。

そして、彼女にはもう予習も復習も必要のない教科であった。

それは決別の言葉であった。

彼は、彼女の様子から悟ったようだった。

一言だけ言った。

「・・・ありがとう」

その言葉だけでよかった。ごめん、と言わなかった。どちらが悪い話ではない。ただ・・・彼の肩を叩き続けることができなかったのだ。他の人が、彼の肩を叩いてしまったのだ。それだけのことだ。

「だから、私の用事は終わりました」

涙も出なかった。

ああ、そうなのか、という覚悟が事前にあったからだと思う。

「いえ・・・私の疑問がもうひとつだけ残っている」

彩世は言った。顔を上げて、その人を見た。近くでちゃんとその人を見るのは初めてのこともかもしれない。朝からスーツを着ているのに少しもくたびれたかんじがしなかった。よく磨かれた革靴を履き

、細身のスーツであったけれども下卑た印象はまったくない。衿の高いボタンダウンに品のよいタイを締めていた。

「あなたがそんなに綺麗な文字を書けるのはどうしてなのかな、ということです」

彼はそれを聞いて笑った。頬を緩めて・・・青年特有の微笑みを見せた。

■24

「書道を習っていたからかな。文字は形であり音であり温であるという意味が今になってわかった。確かに・・・あなたの文字には温度があった」

彩世は顔を上げて、怪訝な顔をした。彼は笑った。

成人した男性の顔だった。

・・・どこか不安そうなあの人の顔と違っていた。どうしてなのだろう。この人の顔を見ていると、どこか落ち着く。

「形的美醜は問題ではなく・・・ひとつひとつを考え抜いている文字は、すぐにわかる。あなたの答案はまさしくそれだった。誰が自分の考えを読むのか想定していた」

・・・それはあの人から学んだことだった。綺麗な文字だね、綺麗な文章だね、と褒めてくれた人が居たから。だから、彼女は誰かに見せる文字について意識するようになったのだ。

どうか、次の春こそは、彼の上に桜が舞い散るように、と思った。

隣の席の彼女と同じ大学であれば、なおさら良いのに・・・そんなことも思った。優位に考えることで哀しみを紛らわしているのかもしれない。

でも、今は本当にそう思っているので、素直にそれを願うことにした。

「男で文字が綺麗だって、誉め言葉にならないと感じる時が殆どだよ」

彼は肩を竦めた。

「・・・私も、かなりの確率で女性だろうと思っていました」

彩世は正直に話した。

「・・・気がつかないと思ったから、気恥ずかしい内容だって書けたけれども・・・」

彼の言葉に、彩世は軽く頷いた。

彼女は表情に乏しいので、彼の動揺した様子と対象的であった。

しかし、彼女は小さく・・・ようやく、言いたかった言葉を言うことができた。

あの人と同じ様に。ただ、出てくるのはこの言葉しかなかった。

「・・・ありがとうございます」

彼はその言葉を聞いて、大きく息を吸った。

そして、彩世に言った。

「文字の往来がこれほど染み入るものだと、僕は感じたことがなかった。お礼を言いたいのは、僕の方です」

それから、遠くで聞こえる消灯前の警告音を聞いて、彩世に言った。

「もうここは締まりますので・・・送って行きますから、部屋を出る準備をしてください」

彩世は頷いた。寒さで身体感覚が失われていた。
でも、知りたいという欲求が彼女の中で生まれていた。

あなたの朝はどんな朝なのですか、

おはよ、と書いてくれたあなたの朝は、どんな朝なのですか。

目の前の人知らない人ではなかったけれども、知らないに等しい人だった。
名前も・・・どの学部学科にいるのかも知らない。

身分を偽って受講した彩世を咎めることもしない。
きっと・・・誰を探していたのかも知っているのだろうと思った。

時を過ぎても色褪せない思い出にできそうな気がするの、この人が残してくれた言葉が彩世の胸を打ったからだ。

「・・・私は、あなたの文字を待つ毎日休まずにここに来ることができました」

寒い朝を迎えても、自分はとうに、受験生ではなくなったのだけれども。
それでも挫けずにやって来ることができたのは・・・あの人への思いを気紛れと片付けることなく終わらせることができたのは・・・やはり、毎日見守って毎日言葉を残してくれた人が居たからなのだと実感する。

もう、制服を着ることはないだろう。コートの下に制服を隠して、こそこそと家を出発することも無い。・・・彼女は年が明けて夏を迎える頃になれば大人の年齢になる。
この予備校にも、毎日怯えながら受講席に座ることもないと思った。

彼女は彼が差し出してくれた筆記具を、机上に置いた。忘れ物と扱ってくれてもいい、と言った。
「もう、私には必要のないものです。でも・・・私が合格した時に使っていたものなので、縁起が良いと思ってくれた人に使ってもらえると嬉しい」

彼はそれを眺めて、短く整えられた指先で取り上げると・・・自分の胸ポケットにしまった。
「僕が貰い受けてもいいのでしょうか。大変に縁起が良いのでしょうか・・・それにあなたがずっと使っていたものであるなら、僕の論文執筆時の御守りにしたい」

彩世が断る理由はなかった。それは本当は彩世の持ち物ではなかったけれども・・・そう・・・あの歴史上高名なプラトンの話をした、大事な思い出の筆記具であったから、自分が持ち続けることはできなかったけれども、その行方がわかる場所にあれば、安堵できると思った。

「・・・御守りとは、随分古い言い方ですね」

「なぜ？・・・大変に効力があると思いますよ。何しろ、僕はあなたに再会できたのだから」

彩世は口籠もった。

何時間も待った相手が自分の想定した相手であったことにも驚愕していたけれども・・・

あの美しい文字を書く人が男性で・・・自分の大学の先輩で・・・もっと昔から知っていた人物であったと知って・・・どうにも落ち着かない気分になってしまっていた。

卒業したのに、制服を捨てられない自分に腹が立った。そして制服を着て仮面を被ったような状態であれば平然としていられない自分を憐れんだ。

誰も自分を見つけることができないだろうと思ったのだ。

彼が見つけてくれれば良いのにと考えたのに、その一方で、彼は決してここに彩世が来ないだろうと思っているのだろうなと予想していた。その通りであった。

それなら、彩世はどこにいるのだろうかという疑問が湧き・・・どうにも堪えられなくなって、規律違反を承知のうえで、悶えを書き記し、それに呼応してくれた人物がいた・・・

彩世の在籍する大学に入れば、その先は前途洋々であった。何をしても何をどうしても許される自由な校風であったけれども、それでも、彼女は解決できない憂いについて、考え続けた。春も、夏も、秋も、冬も・・・もう一度春が訪れる前に、もう一度確認しようと思った。

・・・それが今回の動機だった。

■25

「ここは寒い。送って行くから準備をしてください」

彼はそう言った。そして顔をあげて・・・スクリーンが巻き上げられている場所を見つめた。

「そうか、あなたはこれで終わりなのですね」

4年生と1年生では、おとなとこどもほどに違いがある。学舎も違うし、彼は来年からは大学院に進むらしい。そうなれば、もっと違う世界の人になる。

彩世の通う大学では、大学院に進学希望者が多かったが、受験の時より倍率が高かった。そこに進めば、世界の学術研究者と交流することができて、将来が約束されているも同然だからだ。

「・・・考え込むあなたの様子はとても興味深かった。・・・こんな風に真摯に学ぶことについて、忘れていたと思い、反省したものです」

彩世は顔を赤くした。首を勢いよく振る。自分はそんな風に表してもらえるほど、善い人ではなかった。

彼は笑った。

「・・・こんな風に短い期間であったかもしれないけれども。時間数にしてみれば僕は誰よりも長い時間を、あなたを見ていたことになる。・・・気味悪いと思わないで欲しいのだけれども・・・」
端整な貌をした、清潔感のある人物だった。講座の女生徒が噂していたのを覚えている。彩世は、後方の席であったのでその会話に加わることはなかったのだが、確かに・・・目の前の人物は、目を引く人物であった。

授業の準備がいつも完璧で、時間通りに始まり、時間通りに終わるのは、きつとこういう有能な助手がいるからなのだろう。

それを考えると、答案提出の発案や採点の基準決定者は、彼なのかもしれないとさえ思った。

彩世は掠れた声で言った。

荷物はずべて鞆の中だった。ここではただ・・・じっと、彼の来訪を待っていただけであった。

「私のことを軽蔑しないのですか」

「どうして自分が低評価されることを確認するのですか？」

彼は不思議そうに言った。

「あなたは現役で合格し、事情があったとは言えども予備校の授業で優秀な成績をおさめている。・・・どうか、その小さなひとつひとつを大事にしてください。・・・僕はあなたを尊敬していますよ。・・・途中で放置することができたのに、あなたは最後までここにやって来た。だから、僕はあなたの言葉を待つ・・・毎日が楽しかった」

「私もです。あなたの言葉があったから、救われました」

彩世は正直に告白した。もし、彼が大人でなかったのなら、気恥ずかしくてとても言うことができな

いと思っていた言葉ばかりであった。

「どこかで・・・私を肯定してくれる人を探していたのだと思います。私のすることや私の確認したいことを遂行するために、自分がしていることの愚かさを非難するのではなく・・・それでいいよ、とってくれる人を探していました。

けれども、あなたはわかっていたのに・・・私の言葉だけに回答した」

彼は肩を竦めた。どうかな、と言った。

「僕にも下心はありましたよ。・・・この文字の主を知っているという優越感と・・・そして、この人の悩みを知っているのは僕だけだと思って得意になった。不安も希望も捨てて・・・もっと違う外の世界を見てくれれば良いのに、と思った」

「外の世界？」

彼は唇を引いて、しまったというような顔をしたけれども・・・誰も聞いていないという開放感からか、そっと・・・自分の思いを言葉にした。

彼の言葉は、文字と同じであった。

色と香と温があった。

あたたかく、高雅な香りがして・・・そして色鮮やかであった。

彩世にはそう思えた。

最初に、彼女を見かけた時に声をかければ良かったのに、彼はそうしなかった。彩世が何か・・・目的があると察したからだ。

そして知らないふりを続けた。

最終日まで。

そして彼女の答案の氏名記入欄を職権で修正し、彼女の受講権利を守ってくれた。

「そう。・・・本来、あなたの居るべき世界。・・・大学は享楽の世界ではなく、本当に学びたい人にはそうすることのできる環境が整っていることをあなたにははっきり見えていないように思いました」

彩世は黙った。

確かに、大学には様々な文献や図書館の充実や・・・上級生との交流や、季節折々の行事に留学制度など様々な学生への配慮が充実していた。

重ねた思い出に憂えて居る暇はないほどに。

「ありがとうございます」

「あなたの未来が、あなたを照らすように」

彼はそれだけ言うと、ゆっくりと立ち上がった彩世の肩を軽く叩いたので、彼女は小さな悲鳴を上げた。

彼は、慌てて謝った。

「ごめん・・・痛むか？」

いいえ、と彩世は首を振った。

痛いのではない。

・・・肩をたたかれたからだ。

『戀に、肩をたたかれた』

その瞬間が・・・彼女にいまひとたび、訪れたから。